

大多喜町市場台遺跡

— 国道297号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 —

平成8年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

お お た き い ち ば だ い
大多喜町市場台遺跡

— 国道297号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第286集として、千葉県土木部大多喜土木事務所の国道297号道路改良事業に伴って実施した夷隅郡大多喜町の市場台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の土偶や古墳時代の大型竪穴住居跡、古代の製鉄や鍛冶に関連する遺物が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また大多喜町や上総地域の歴史を知る資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月29日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部大多喜土木事務所による、国道297号道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県夷隅郡大多喜町横山字市場台592-1ほかに所在する市場台遺跡（遺跡コード 441-002）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部大多喜土木事務所の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 西山太郎、市原調査事務所長 森尚登の指導のもと、研究員 土屋治雄が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成7年6月1日～7月24日
整理作業 平成7年10月1日～10月31日
- 5 本書の執筆は、研究員 土屋治雄が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部大多喜土木事務所、県立総南博物館、大多喜町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000「大多喜」(NI-54-20-13-1)「国吉」(NI-54-20-9-3)
第2図 大多喜町土地基本図(5) 1/5,000
- 8 周辺空中写真は、京葉測量株式会社による平成7年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 本書で呼称した遺構番号は、調査時に呼称した番号を使用した。
- 11 挿図に使用したスクリーン tone 及び記号の用例は、該当場所に示した。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
2	遺跡の位置と環境	1
(1)	遺跡周辺の地理的環境	1
(2)	遺跡周辺の歴史的環境	4
II	検出した遺構と遺物	7
1	縄文時代	7
(1)	遺構	7
(2)	遺物	9
2	古墳時代	21
(1)	竪穴住居跡	22
(2)	竪穴状遺構	26
(3)	その他の遺構	27
(4)	製鉄遺物	27
3	時期不明の遺構と遺構外出土遺物	32
(1)	遺構	32
(2)	遺物	33
III	まとめ	34
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25,000)	2	第11図	出土縄文土器(3)	14
第2図	市場台遺跡と周辺地形図(1/5,000)	3	第12図	出土縄文土器(4)	15
第3図	市場台遺跡上層遺構配置図(1/150)	5	第13図	出土縄文土器(5)	16
第4図	21号跡実測図	7	第14図	縄文時代土製品、石器(1)	20
第5図	16号跡実測図	7	第15図	縄文時代石器(2)	21
第6図	22号跡、11号跡実測図	8	第16図	6号竪穴住居跡実測図	23
第7図	19、7、10、24号土坑実測図	9	第17図	6号住居跡カマド実測図	23
第8図	9号跡実測図	9	第18図	6号住居跡遺物出土状況	24
第9図	出土縄文土器(1)	12	第19図	6号住居跡出土土器(1)	24
第10図	出土縄文土器(2)	13	第20図	6号住居跡出土土器(2)	25

第21図	6号住居跡出土土錘、鉄製品	26	第26図	製鉄関連遺物実測図	30
第22図	20号竪穴住居跡実測図	26	第27図	12号遺構、23号土坑	
第23図	17号跡、15号跡実測図	27		14号柱穴列実測図	32
第24図	18号土坑、2号溝実測図	27	第28図	13号、8号溝実測図	33
第25図	製鉄関連遺物分布図	28	第29図	遺構外出土石器	33

表 目 次

第1表	縄文土器集計表	18	第3表	椀形滓計測表	31
第2表	鉄塊系遺物計測表	31	第4表	鉄滓計測表	31

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真		図版8	12号、18号、2号、13号、8号、14号 全景
図版2	6号竪穴住居跡出土土器、土偶		図版9	出土縄文土器
図版3	調査前の状況、11号、16号全景		図版10	縄文時代土製品、石器
図版4	17号、21号、22号、19号全景		図版11	6号住居跡出土遺物
図版5	7号、10号、9号全景		図版12	6号住居跡出土遺物、製鉄関連遺物
図版6	6号住居跡全景、カマド、甕出土状況			
図版7	6号住居跡遺物出土状況、20号全景			

I はじめに

1 調査の概要

国道297号は大多喜街道とも呼ばれ、市原市の内房地域と南房総の勝浦市を結び、房総半島を斜めに横断する国道である。夏期や休日には、県内外から外房の海浜リゾートに向かう車が通行する交通量の多い国道である。道路整備が進められているものの、部分的には歩道もなく狭くて危険な箇所もある。このため、千葉県土木部大多喜土木事務所は、国道297号線の道路改良事業を計画し、事業地区内に所在する市場台遺跡の取扱いについて関係諸機関と協議した。その結果、工事を行う前に発掘調査を行い、遺構、遺物の記録をとる記録保存の措置を講ずることとなり、平成7年6月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。

発掘調査は、平成7年6月から7月まで行い、700㎡の縄文時代以降の遺構、遺物を含む上層の本調査を実施した。上層の本調査は、バックホーにより表土除去を行い、終了後全域の精査、遺構検出に移行し本調査を実施した。表土の堆積状況は南に薄く30cmから60cmであった。検出した遺構を掘り上げた後、覆土土層断面図、遺物出土状況図、平面図などを作成した。また遺物出土状況写真、完掘状況写真などの撮影も行った。発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20m×20mの方眼の大区画（グリッド）を東西4区画、南北6区画設定し、西から東に向かってA・B、北から南に向かって1・2・3とし1A、2Bのように呼称した。さらに、大グリッド内を2m方眼の小区画（グリッド）に分割し、西から東へ00(区)・01(区)・・・09(区)、北から南へ00(区)・10(区)・・・90(区)とした。したがって、各々の小グリッドは、1A-00、2B-50、3C-55などと呼称した。はじめの2桁が大区画（大グリッド）を、後の2桁で小区画（小グリッド）を表し、調査区内での位置を表せるようにした。遺構番号は、調査順に1号跡、2号跡と呼称した。遺物の取上げについては、遺構に伴って出土したものは遺構内の通し番号で、包含層の遺物については2m×2mの小グリッドごと一括して取り上げた。

2 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡周辺の地理的環境（第2図）

市場台遺跡は、夷隅郡大多喜町の北端、上瀑地区横山字市場台^{かみたき}に所在し、標高は、約39mである。全長65km、千葉県第4位の二級河川である夷隅川中流左(北)岸に位置する。夷隅川は、勝浦市を水源とし、多くの蛇行を繰り返しながら大多喜町、夷隅町を通り岬町で太平洋へ注いでいる。北流してきた夷隅川は、大多喜町で急激に東向きに流れを変えている。川沿いには、氾濫原を伴う広い河岸段丘が形成されており、支流大久保川の開いた沖積地の中に島状に残った微高地上に位置するのが市場台遺跡であり、夷隅川に流入する小土呂川と遺跡のすぐ南側を流れる大久保川という二本の小河川に挟まれている。

遺跡の北、西、南側には狭い谷の水田面が、東側には比較的平坦な広い水田面が広がっている。狭い水田面が終わった北や西には標高85m～170mの丘陵地帯が続いている。

千葉県では、国庫補助を受けて4か年計画で県内全域の埋蔵文化財分布調査を実施し、昭和62年度に安房夷隅地区について調査を実施した。この資料をもとに夷隅郡教育委員会は、平成2年度に国県の補助を

第1図 市場台遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)



1. 市場台遺跡

- 2. 女ヶ谷遺跡
- 3. 横山堀之内遺跡
- 4. 台古墳群
- 5. 台遺跡
- 6. 高谷古墳群
- 7. 打岡台古墳群
- 8. 打岡台遺跡
- 9. 横山白山台遺跡
- 10. 愛宕山古墳・横穴群
- 11. 船子遺跡
- 12. 堀之内上の台遺跡

第2図 市場台遺跡と周辺地形図(1/5,000)



今回の調査範囲

- 市場台遺跡範囲
- ▨ 今回調査区

0 (1/5,000) 200m

受けて分布調査を行っている。市場台遺跡では古墳2基が確認され、畑等に土器、黒曜石等の散布が確認され、遺跡と認定された。市場台遺跡の面積は、37,000㎡で、今回調査を行った地区はその北東側に当たり、面積700㎡、遺跡面積の約1.9%に当たる。

(2) 遺跡周辺の歴史的環境 (第1図)

大多喜町には、平成3年の時点で合計163の遺跡が確認されている。その時代別の内訳は、先土器時代2遺跡、縄文時代101遺跡、弥生時代12遺跡、古墳時代41遺跡、奈良平安時代23遺跡、中近世遺跡43遺跡であり、古墳は47基が確認されている。中近世の塚は、77基である。このように多くの遺跡、遺構が所在しているが、発掘調査が行われた例は少なく、昭和20年代に3件と昭和50年代に5件となっている。周辺の遺跡を時代別に見ると次のようになる。

先土器時代

旧石器が出土しているのは町内で3か所である。女ヶ谷遺跡と境界を接する台遺跡の発掘調査でナイフ形石器を、また遺跡から2km南の森宮地区において、工事中に地表から約2mの位置で石刃と石斧が出土している。泥岩ブロックの混じるローム層の中からであった。

縄文時代

縄文時代では、中後期を中心に遺跡が分布している。周辺の遺跡には、市場台、横山白山台、台、寺ノ台、船子、堀之内上の台などの遺跡が知られる。主な遺物では、市場台遺跡で土偶など、横山白山台遺跡では石棒など、船子遺跡では石棒、土偶、土版などが表面採集されている。発掘調査の行われた堀之内上の台遺跡では石剣、石棒、土偶14個体のほか竪穴住居跡も検出されている。

弥生時代

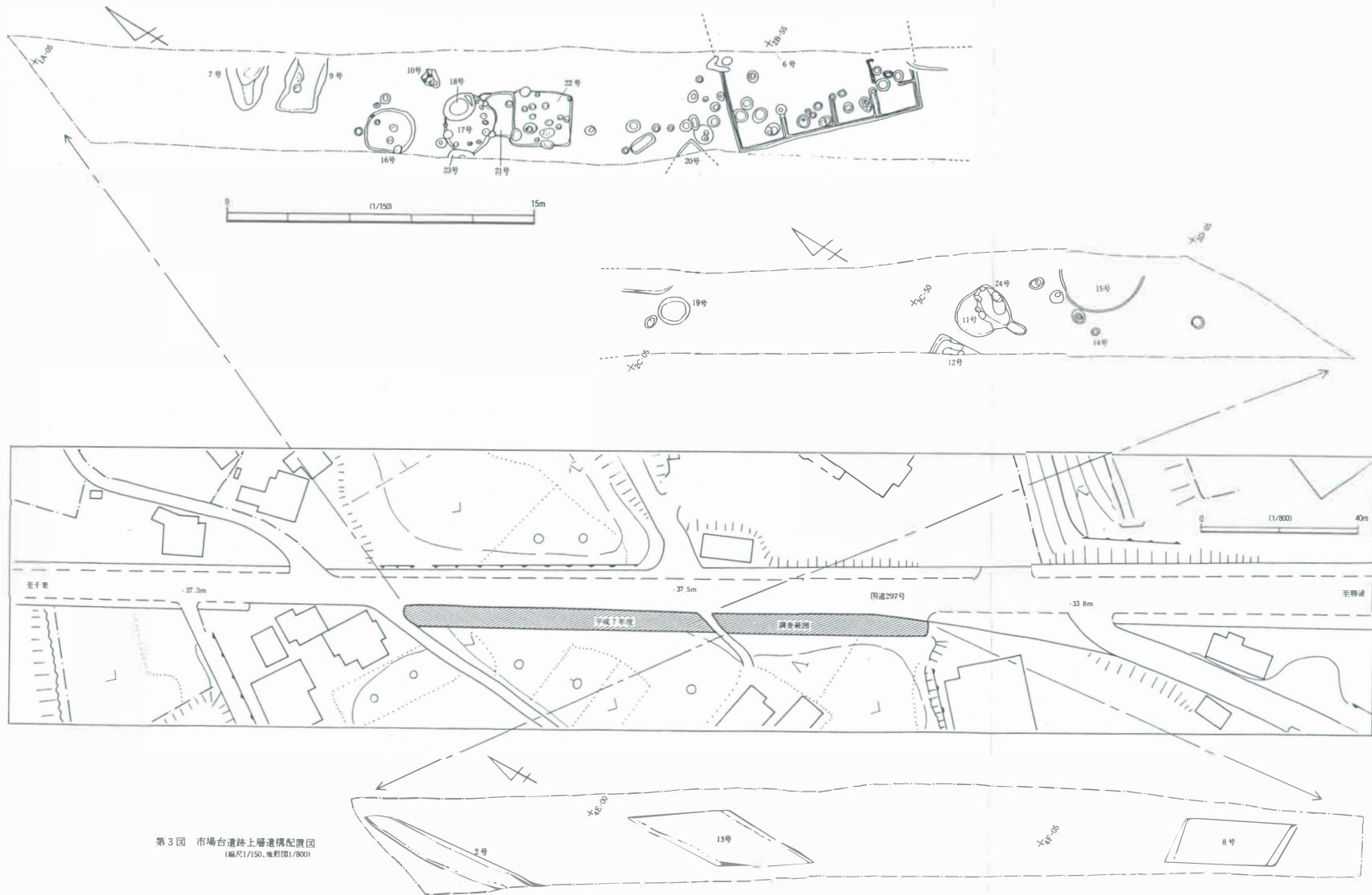
弥生時代の遺跡数は少ない。主な時期は中後期であり船子、台、横山白山台、打岡台などの遺跡が知られている。船子遺跡の大部分は県立大多喜女子高校の敷地になる。昭和43年に3個体の須和田式土器が出土している。台遺跡では、発掘調査で中期後半の宮ノ台式土器のほか竪穴住居跡、また、横山白山台遺跡、打岡台遺跡でも弥生時代後期の竪穴住居跡が8軒検出された。

古墳時代

周辺には、台(12基)、高谷(15基)、打岡台(9基)、愛宕山(4基)、横山峰の台(2基)などの古墳群がある。町全体では、前方後円墳2基、円墳45基が確認されているが、1基を除く46基は市場台遺跡のある上瀑地区に集中している。町内の横穴は41基で周辺には横山峰の台(4基)、愛宕山(27基)、高谷(6基)などの横穴群がある。台古墳群2号墳では、昭和13年に白銅製の画文帯環状乳神獣鏡(半円方格帯神獣鏡)が出土している。この鏡は、銘文入りの鉄剣を出土した埼玉県稲荷山古墳出土の鏡と同じ鑄型で作られた同範鏡であることが確認されている。全国でも5例のみという希少な鏡である。また、市場台遺跡内の横山1号墳(消滅)から房総で最も古いと考えられている馬具の一部であるf字形鏡板付轡くつわと剣菱形杏葉きょうようが出土している。この時代の住居跡(集落跡)は、当遺跡で発見されたほか打岡台、横山白山台遺跡で見つっている。

歴史時代

横山堀之内遺跡で、奈良平安時代の鍛冶跡が見つっている。打岡台遺跡でも発掘調査で鉄滓てっさいが出土している。平安時代の集落跡が女ヶ谷遺跡で発見された。中世の城跡では城の腰城跡や大多喜根古屋城跡が、近世では10万石の本多忠勝を初代城主とし、県立総南博物館の建つ大多喜城が知られている。



第3図 市場台遺跡上層遺構配置図
(編尺1/150、地形図1/800)

II 検出した遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 遺構 (第3図)

調査区北半部で多量の縄文土器が出土し、竪穴状遺構4基、土坑4基、性格不明の遺構1基を検出した。竪穴状遺構はいずれも炉を持たず、踏みしめ等による床面の硬化も見られないことから、日常的に生活した住居ではないと思われる。しかし柱穴が掘られていることから上屋のある施設であった可能性は考えられる。土坑のうち19号は、形態、遺物から墓の可能性はある。それ以外の土坑の性格は不明である。

ア 竪穴状遺構

21号跡 (第4図、図版2・4)

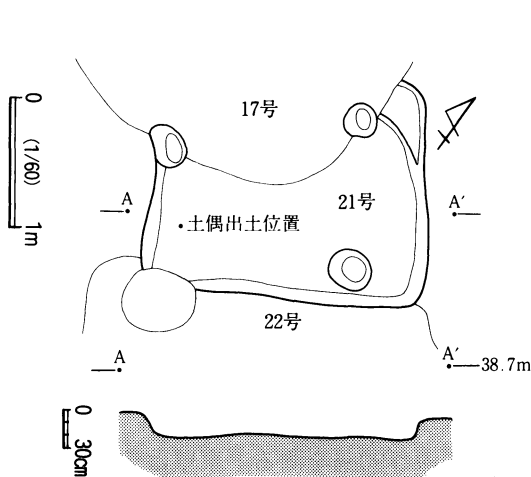
17号跡と22号跡の間にはさまれる形で重複し、残りがよくない。平面形は方形になると推定される。確認できた東西辺は2.25m、南北辺1.5m、確認面からの深さは16cmである。21号が一番古く次いで22号、17号の順である。柱穴は3基で直径25cm～35cm、深さは22cm～29cmである。床面は平坦で、炉はなく、床面の硬化は見られない。床面から土偶を出土したほか、遺構内から比較的多くの縄文土器片が出土した。

16号跡 (第5図、図版3)

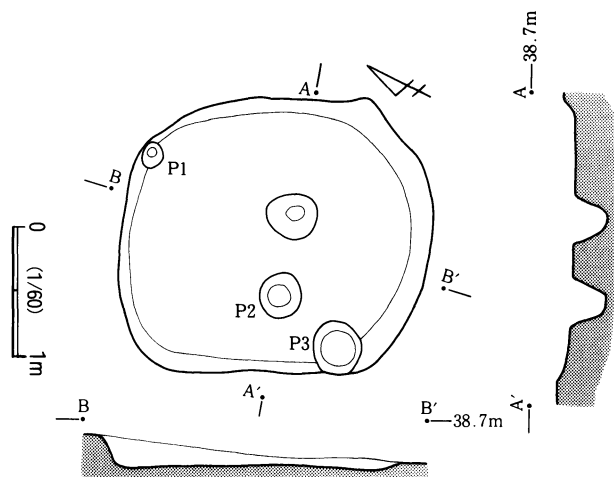
平面形が隅丸方形で長径2.5m、短径2.15m、確認面からの深さは10cm～25cmである。柱穴は4基あり、中央の柱穴が直径39cm、深さ26cm、ほかは北からP1—直径19cm、深さ6.6cm、P2—直径28cm、深さ5.9cm、P3—直径33cm、深さ28cmである。床面は平坦で、炉はなく、床面の硬化は見られない。縄文土器片が多く出土した。

22号跡 (第6図、図版4)

平面形は隅丸方形で、東辺2.75m、西辺2.9m、南辺2.5m、北辺2.6m、確認面からの深さは6cmである。柱穴は17基が不規則に検出されたが、主柱穴は確定できなかった。柱穴の直径は22cm～62cm、床面からの深さは15.6cm～52.4cmである。床面は平坦で、炉はなく、床面の硬化は見られない。少量の縄文土器片が出土した。



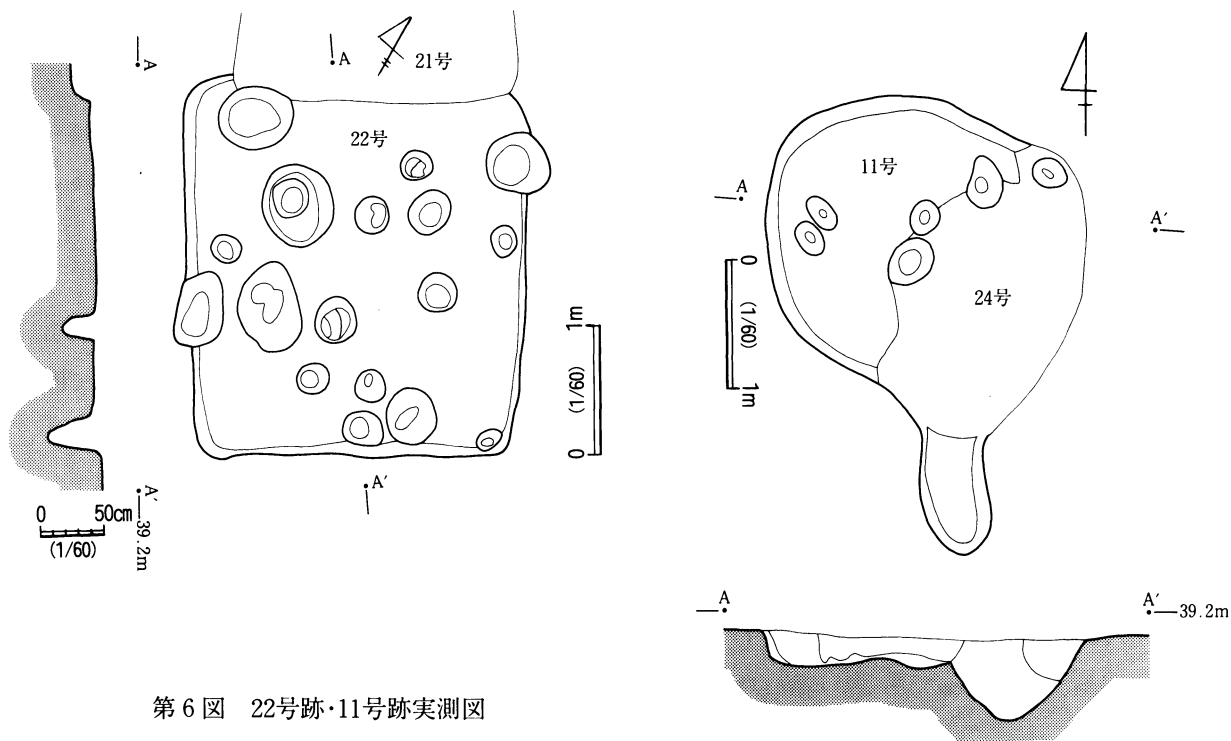
第4図 21号跡実測図



第5図 16号跡実測図

11号跡（第6図、図版3）

平面形は円形で、南側に長楕円形の張り出し部がある。東西2.55m、南北2.2m、確認面からの深さは21cmである。張り出し部は長さ1m、幅50cmである。中央に2基と壁際に4基の柱穴がある。中央の2基は床面からの深さが36cmと38.5cmであり、ほかの4基は直径25cm～33cm、深さ16cm～33cmである。床面は平坦で、炉はなく、床面の硬化も見られない。遺構内から多量の縄文土器片が出土した。



第6図 22号跡・11号跡実測図

イ 土坑

19号跡（第7図、図版4）

平面形は、北西から南東方向に長い楕円形で、長径1.57m、短径1.35m、確認面からの深さは30cmの土坑である。床面は平坦である。遺構西端から凹石、東端から深鉢の底部を出土したほか、多くの縄文土器片が出土した。

7号跡（第7図、図版5）

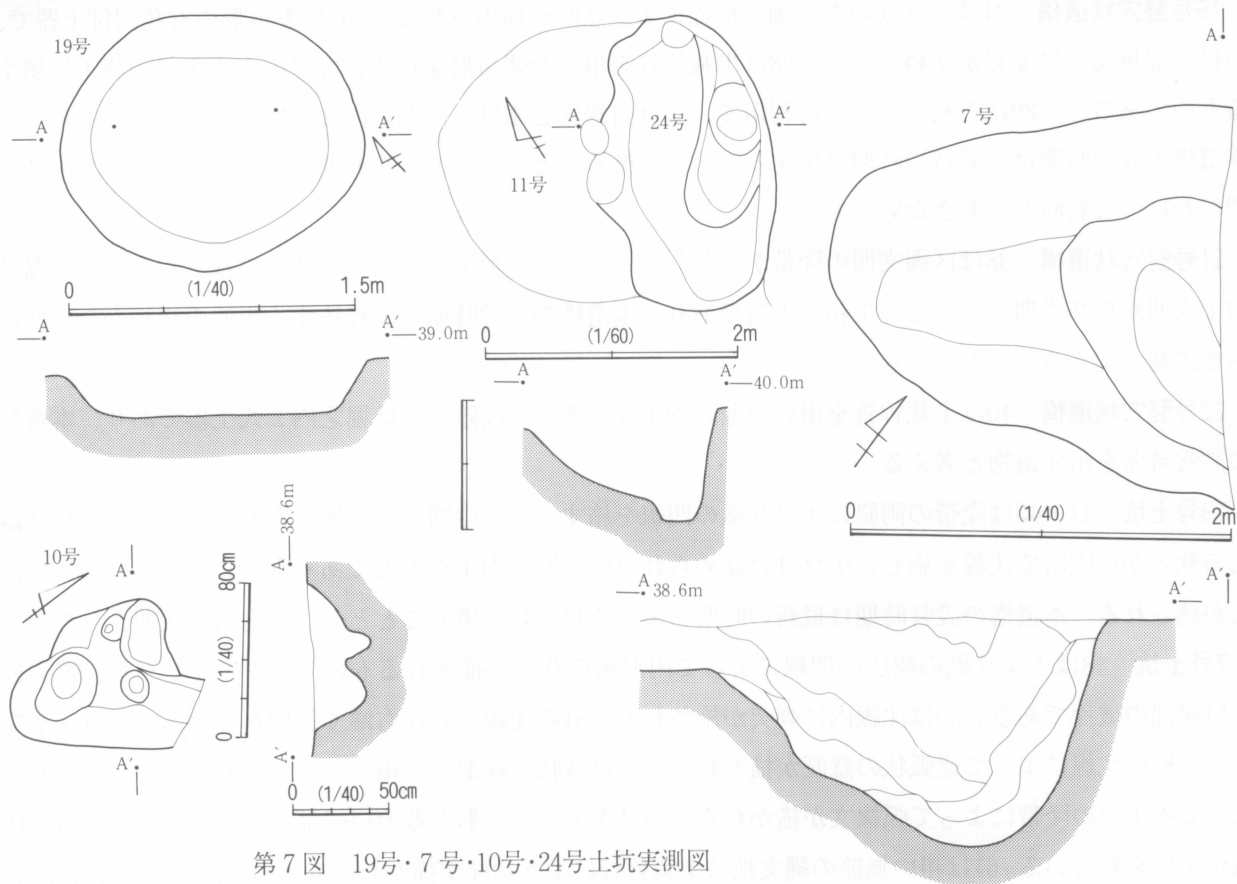
遺構の1/2は調査区外になり、国道297号により削り取られてしまって不明であるが、平面形は楕円形になると思われる。確認できた長径は2.02m、短径2.08m、確認面からの深さは1.2mである。上層から灰釉陶器片1点と鉄製品1点が出土したほか、上層から下層にかけて多量の縄文土器、石鏃、黒曜石片が集中して出土した。

10号跡（第7図、図版5）

楕円形の2基の土坑と2基のピットからなる。長径は70cm、短径は45cm、深さは30cmである。少量の縄文土器片が出土した。緑泥片岩製の石棒と思われる石製品が出土した。

24号跡（第7図）

平面形が楕円形の土坑で、長径2.3m、短径1.9m、確認面からの深さ90cmを測る。東壁は急角度で立ち上がるが、西壁は傾斜がなだらかである。軽石製石棒片が出土したほか、縄文土器片が多く出土した。

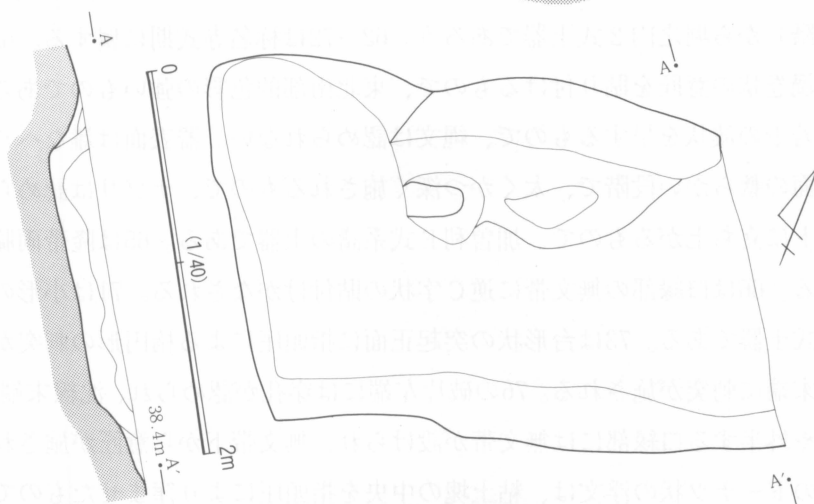


第7図 19号・7号・10号・24号土坑実測図

ウ 性格不明の遺構

9号跡 (第8図、図版5)

平面形が長方形をした遺構で、東側は調査区外になるため未調査である。幅1.6m、確認できた長さ2.7m、深さ25cmであるが、底面は凹凸があり一定しない。出土遺物はすべて縄文土器片であった。



第8図 9号跡実測図

(2) 遺物

ア 縄文期遺構出土土器(第9~13図、図版9)

11号竪穴状遺構 1~6はキャリパー形土器の胴部であり、5の口縁部と胴部の区画は、粘土紐上に施されたナヅリ風の凹線により表出される。7~16は曽利式土器であり、特徴的な条線文と隆帯による蛇行懸垂文が施される。17は橋状把手部上面に沈線による渦巻文を施すものである。18は口縁端部に沈線を施すもので、堀之内1式土器であろう。19~23は胎土に繊維を混入し、薄手ながらも比較的堅緻な焼成で、器表面の剥落が著しい。黒浜式と思われる。本遺構の設営時期は、量的に主体となる土器(1~16)から勘案して、加曽利EⅡ式期と思われる。

16号竪穴状遺構 24はナヅリのない細い描線により意匠が描出される。26は瓢箪形^{ひょうたん}の有孔罎付^{つば}土器で、口縁上部無文帯に赤彩が認められる。28は半裁竹管を用いた朝顔形深鉢で、堀之内1式土器の終末に属するものであろう。29は曾利式土器の再利用で、30は紐線文を添付した堀之内2式期の粗製土器であらう。本遺構の設営時期は、最新の時期に属する28・30に拠ることとし、おおむね堀之内1式期から堀之内2式期にかけてと判断しておきたい。

21号竪穴状遺構 38は区画文間の隆帯が剥落したキャリパー形土器である。39は半裁竹管を用いた堀之内1式期から2式期にかけての半精製土器であり、本遺構の設営時期は、後述する土偶の様相から、堀之内2式期と捉えることができる。

22号竪穴状遺構 40は半裁竹管を用いた堀之内1式土器（新段階）又は堀之内2式土器であり、本遺構の設営時期を示す遺物と考える。

19号土坑 41・43は隆帯の両脇にナヅリ風の凹線を施す。42は中期後半に属するものであろう。44は器面の軟らかい段階で沈線を施し、ナヅリは認められない。堀之内1式土器であらう。45は底部付近まで縄文が施される。本遺構の設営時期は最新の時期に属する44・45に拠ることとし、堀之内1式期としたい。

7号土坑 48はナヅリ風の幅広の凹線によって円形風の意匠が描かれるもので、キャリパー形土器の波状口縁部の破片である。50は沈線内に刺突が施される。51の沈線は破片右端で途切れている。52は丁寧なナヅリ風の沈線によって連弧状の意匠が描かれる。55は波状口縁部が欠損しており、幅広のナヅリが施された2本1対の隆帯によって弧線文が描かれる。56はキャリパー形土器の口縁部下半の破片で、幅広の沈線が用いられている。61は粗い無節の縄文地に半裁竹管により意匠が描かれるもので、堀之内1式土器（新段階）から堀之内2式土器であらう。62～72は称名寺式期に属する。62は内屈する口縁端部に隆帯による渦巻状の意匠を貼り付けるもので、東北南部的色彩の強いものである。63は沈線が口唇部に抜ける部位が若干の波状を呈するもので、縄文は認められない。器表面は雑なヘラミガキ風の調整がなされ、沈線は器面の軟らかい段階で、太くかつ深く施されるもので、ナヅリは認められない。64、65は口縁内面がフラットに立ち上がるもので、加曾利E式系譜の土器である。65は隆帯両脇に幅広のナヅリ風の凹線が認められる。66は口縁部の無文帯に逆C字状の貼付けがなされる。71は小形の個体である。73～83は堀之内1・2式土器である。73は台形状の突起正面に指頭圧による楕円形の刺突が施される。75の口縁端無文部の沈線末端に刺突が施される。76の破片左端には穿孔が認められ、沈線末端部は刺突が施される。77は薄手で、やや外半する口縁部には無文帯が設けられ、無文帯下から意匠が施される。施文具は半裁竹管ではない。79のドーナツ状の浮文は、粘土塊の中央を指頭圧により窪ませたものである。84は堀之内式期の小形壺等の口縁から胴部上半に設けられる橋状把手の破片であらうか。85は破片左半を中心に赤彩が認められるもので、中期後半に属するものであろう。86～88は円板で、86は中期後半の土器片の再利用、87・88は堀之内1式土器の再利用であらう。89は底径の極めて小さい個体であり、底部付近まで縦位の隆帯が施される。90は堀之内1式土器の椀形土器等の器高の低い個体の底部であらう。91も堀之内1式土器であらう。92は薄手で、内外面ともに縦位方向の丁寧なヘラミガキ風の調整がなされる。破片上端には細かな縄文が施され、底径が胴部径に比べ著しく劣る個体であり、晩期前半を中心とする時期に属するものであろう。本遺構の設営時期は、量的に主体となる土器群のうち最新のものに拠ることとし、61、73～84、87、88、90、91等の堀之内1式土器、そのうちでも新段階としておきたい。

10号土坑 93は中期後半、おそらく加曾利EⅢ式土器（新段階）の環状把手^{とって}であらう。本遺構の設営時

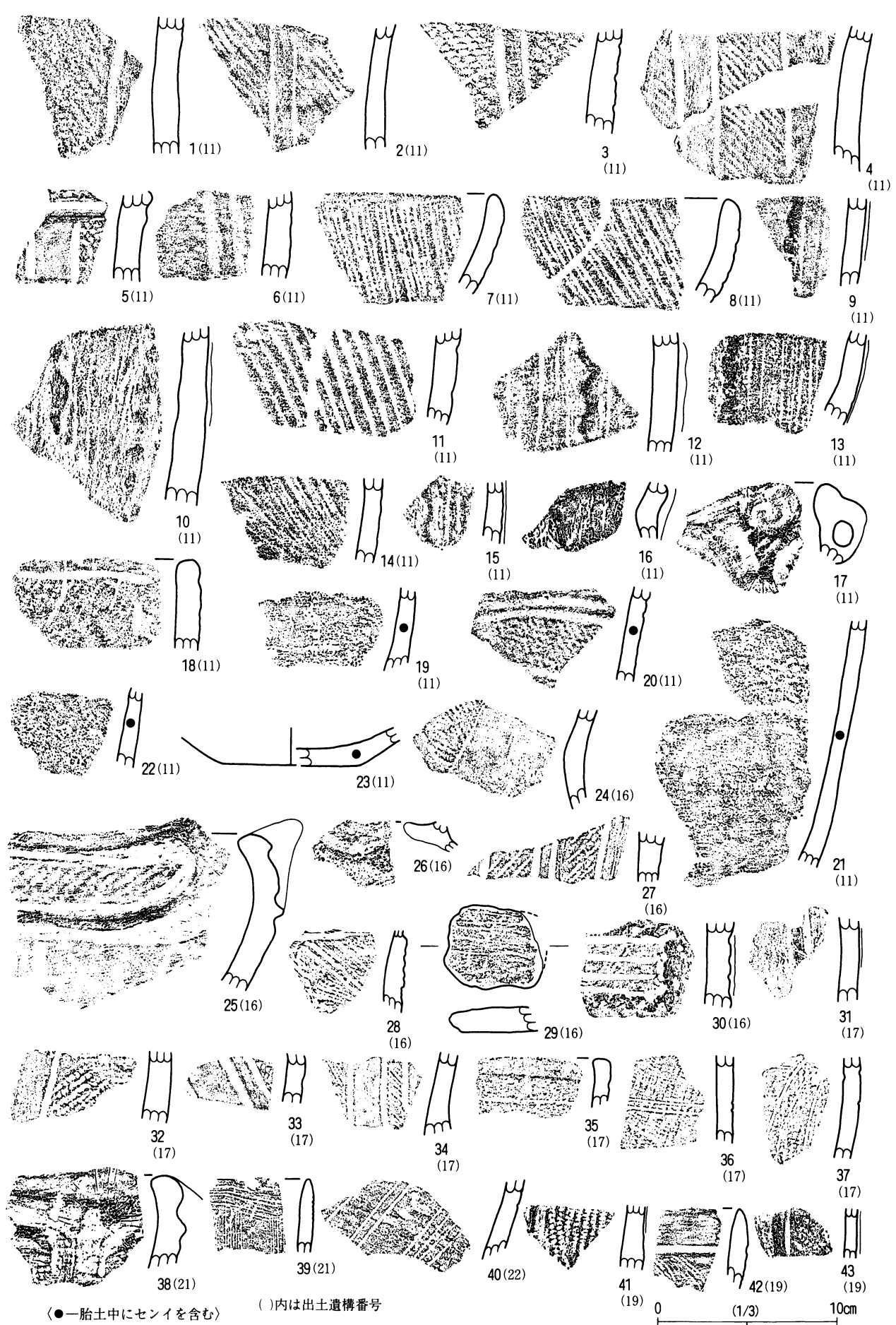
期もこの時期と考える。

9号性格不明遺構 94の微隆起両脇には粗雑なナゾリが施される。95の波状口縁下の口縁部無文帯は小突起が剥落している。101はキャリパー形土器の口縁部である。104、105、110、113の隆帯脇のナゾリは凹線風の効果を有さない。106は隆帯間に縄文を施す。縄文は隆帯上に及び、隆帯脇のナゾリは認められない。称名寺式土器に伴う加曽利E式土器または東北南部的な土器群であろう。108は幅広の反復のナゾリによる凹線風の区画内に縄文を施すもので、凹線と縄文部が非施文部に比べ陰刻的な効果を有している。加曽利E式土器であろうが、後期に下るか否かは判然としない。114はナゾリの顕著な沈線によって渦巻文を描出する。115は縄文地にナゾリの認められるやや幅広の沈線で横位の区画文と、区画文下に渦巻文を施すもので、縄文の磨消し効果は認められない。加曽利E式土器であろうが詳細は不明である。116は瓢箪形の有孔罎付土器の口縁部付近の破片である。117～119は曾利式土器、120の地文は撚糸文である。121はやや内湾する口縁部で、隆帯上にまで縄文が及ぶ。隆帯以下の胴部は破片内ではいっさいの地文、意匠は認められず、比較的粗雑な横位のナデ調整である。称名寺式期に伴うものであろうか。122～127は称名寺式土器である。本遺構の設営時期は、量的にまとまってはいるものの、摩滅の進行した図示不可能な小片ばかりの堀之内1式期の可能性と、良好な破片が多い後期初頭称名寺式期のいずれかと思われるが、どちらか判断しかねる。

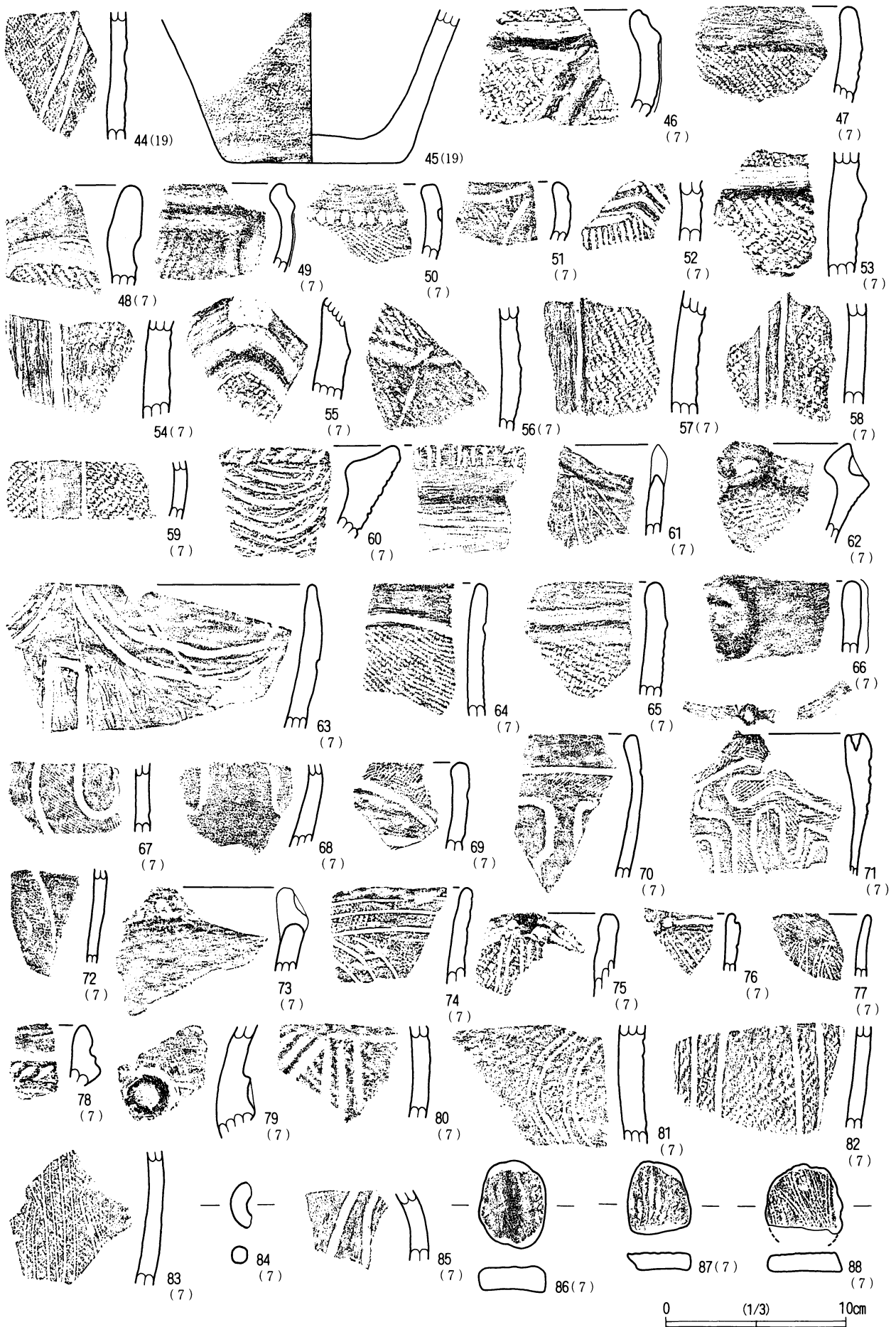
イ 縄文期外遺構及び遺構外出土の土器（第9～13図、図版9）

17号竪穴状遺構 31は隆帯の両脇にナゾリ風の凹線を施すもので、大木8b式土器の胴部下半の破片であろう。32はキャリパー形土器であり、33は破片右上部に無節の縄文が認められ、堀之内1式土器の鉢形土器の胴部破片と思われる。34、35は称名寺式土器、36、37は半裁竹管を用いた堀之内2式土器である。

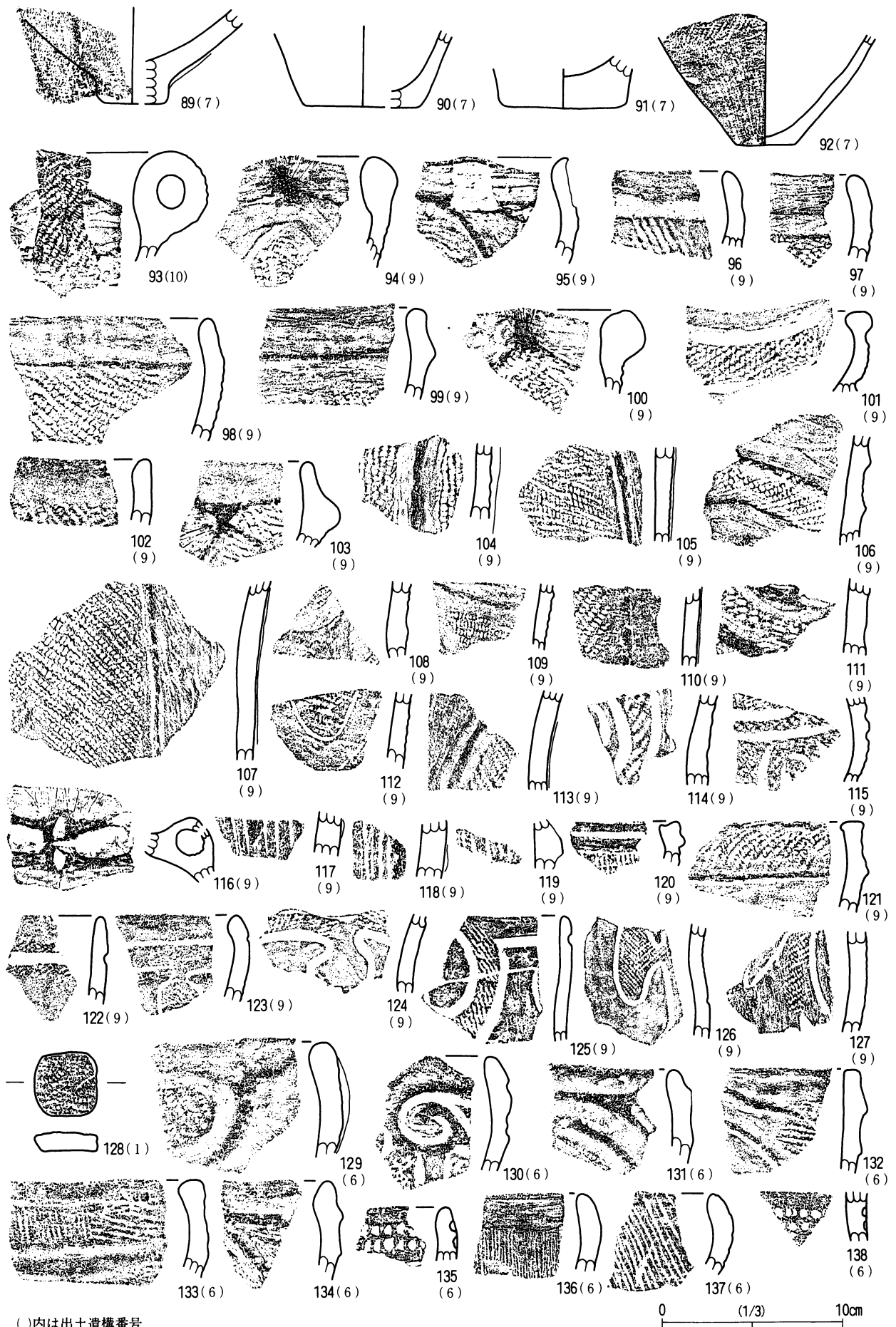
130の渦巻文は隆帯によるものである。132は磨消縄文ではなく全面縄文である。133の地文は無節の縄文である。138は連弧文系土器の胴部括れ部の破片である。147は隆帯による小渦巻文の破片である。149は隆帯の一部が剥落している。153の施文具は半裁竹管ではない。堀之内2式土器であろう。154は後期前半の条線のみ粗製土器であろう。158は横位方向に沈線が施される。162は中期後半に属すると思われる。181は列点を有する称名寺2式土器である。182は2本1対の隆帯を境に上半は縄文、下半には櫛歯状工具による蛇行文が施される。184は堀之内1式期の半精製土器であろう。186は堀之内2式土器の甕形土器の胴部上半の破片であろうか。188は堀之内1式土器の甕形土器の円形突起で、突起正面には縦位の短沈線と、沈線両末端には竹管による円形刺突が施される。突起両側面から内屈する口縁端部文様帯にかけて沈線が施され、沈線の正面側には縦方向の刻みが連続的に施される。突起左側の沈線末端のみ竹管による円形刺突が施される。突起内面左側には棒状工具による刺突が認められる。189は称名寺2式土器、190、194、202、207は堀之内2式土器、192、201、211は連弧文系土器、193、204は同一個体の称名寺1式土器、200、206は曾利式土器である。197、198は後期前半に属する可能性が高く、205は中期後半の両耳壺の把手であろう。209はC字状貼付文内に沈線を有し、櫛歯状工具による懸垂文を有する。東北地方南部の綱取1式土器の系譜を引くものと思われ、堀之内1式土器（古段階）に併行しよう。210の格子状の意匠を有する粗製土器も209に近い時期のものであろう。土製円板のうち179、180、208は後期前半の土器片の再利用であり、187、196は中期後半の土器片の再利用であろう。



第9図 出土縄文土器(1)

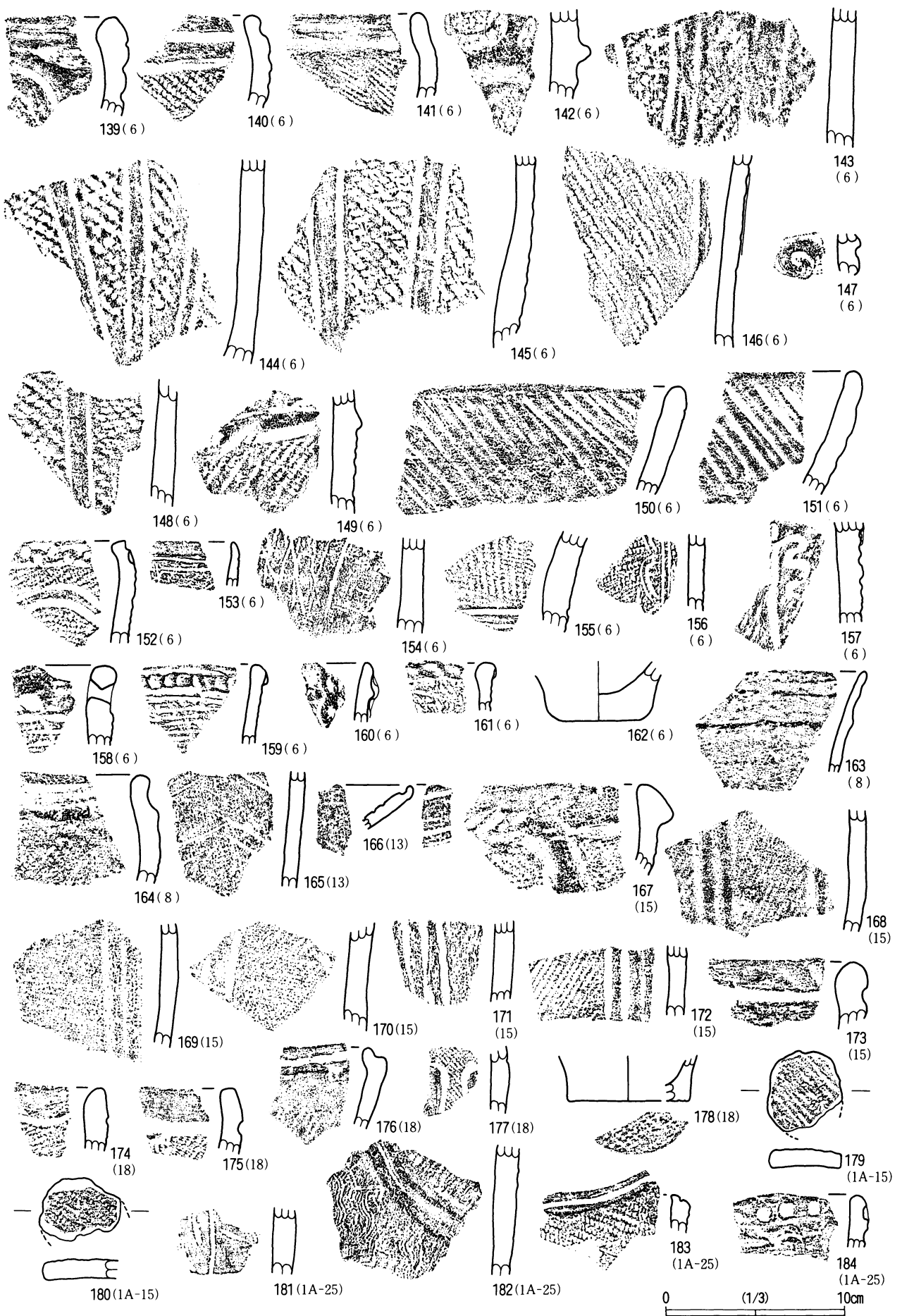


第10図 出土縄文土器(2)

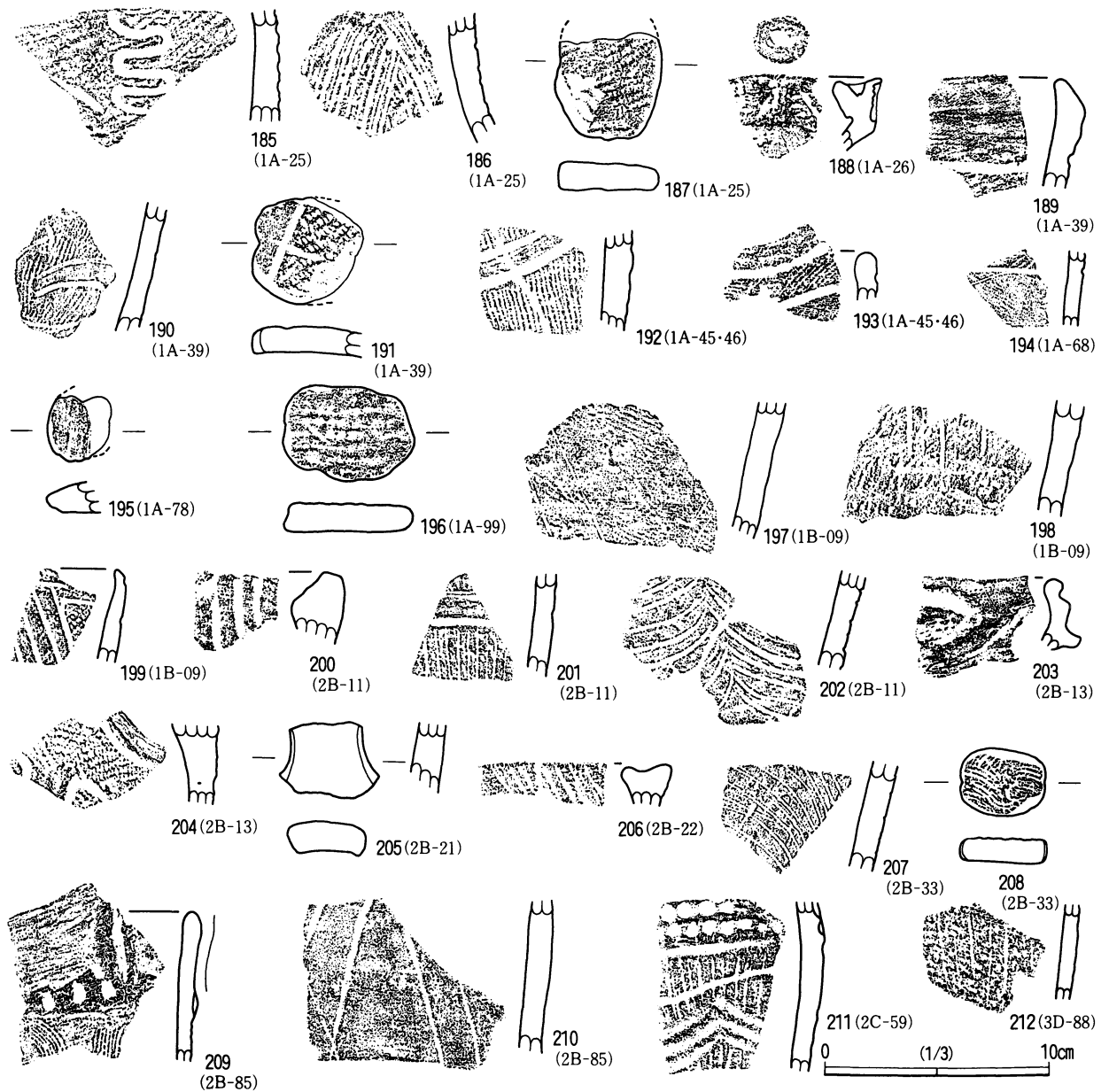


()内は出土遺構番号

第11図 出土縄文土器(3)



第12図 出土縄文土器(4)



()内は出土遺構番号

第13図 出土縄文土器(5)

ウ 縄文土器の出土量と集計(第1表)

市場台遺跡出土の縄文土器の出土量について、下記の分類基準により、遺構別、グリッド別の重量を集計し第1表に示した。

- I群 前期 羽状縄文土器群
- II群 中期 加曾利E式土器群及びこれに併行する土器群
 - A類 曾利式土器
 - B類 加曾利EⅡ～Ⅳ式土器
 - a 加曾利EⅡ式土器
 - b 加曾利EⅢ・Ⅳ式土器
- III群 後期 称名寺式土器群
- IV群 後期 堀之内1式土器群

V群 後期 堀之内2式・加曾利B式土器群

VI群 晩期 前浦式土器群

ただし加曾利EⅡ式土器と加曾利EⅢ・Ⅳ式土器との分離不可能な土器については、Ⅱ群B類のままとしている。

市場台遺跡出土土器群の量的な構成を総括すると、中期後半の土器群が量的には卓越し、曾利式土器を若干含むが、加曾利EⅡ・Ⅲ式土器を主体とし、明瞭な加曾利EⅣ式は少量である。後期前半の称名寺式土器、堀之内1式土器が、量的にはこれに続いている。

時期ごとの分類とは別に、土器片錘、土器片製円板等の土製品については、時期による分類は行わず一括して取扱った。ただし、これらについては全点を図示している。土偶についても、土製品として扱っている。

底部の分類に際しては、土器に準拠したが、このうちV群は底部に網代痕が認められるもの及び器表面に黒色処理や縦位方向の丁寧なヘラミガキ風の調整がなされ、極めて薄手で焼成が堅緻なものである。また、VI群は胴部以上の部位の径に比して、底径が著しく小さいものである。

I群及び上記V・VI群に相当しないものを、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群として一括して取り扱った。

底部による最低個体の算出方法は、破片の底面部位の残存度をもとに計測した。底部を各群ごとに、各底面破片の残存の割合を、1/8、2/8、・・・全部残っている場合は8/8として記録し、分子の総計を8（分母）で除算した。あくまで、遺跡出土土器群の構成比を補助するための作業であり、この数字自体が直接的に、何らかの実体を示すものではない。なお、底面の残存度が1/8未満のものに関しては、0として扱い、算出の対象から除外している。したがって、集計表で重量表示がありながらも最低個体数の表示のない部分が存在する。

エ 土製品（第14図、図版10）

213は21号竪穴状遺構から出土したもので、妊婦を表現したと思われる土偶である。ふくよかに表現された腹部とくびれた腰部は、ややデフォルメ気味ではあるものの、十分に写実的である。腹部上半からヘソ部、胸部にかけてはつまみ上げたような隆帯が施され、妊娠8か月以降に発現する妊娠線の誇張表現である可能性がある。表面は黒味がかたくすんだ淡黄灰色を呈する。胎土は、表面に近い5mm程度の部位は、淡橙褐色で、それ以外は黄色がかかった淡灰色である。焼成は比較的堅緻であり、砂粒を多く含む胎土で、白色鉱物粒（径0.5mm～1mm程度）をわずかに含む。製作工程を推し量るような、明瞭な粘土塊の接合痕は認められない。砂粒を多く含むためか、表面の風化が進行している。風化の進行により断言はできないが、股間部・縦位の隆帯部・右側括れ部以外の部位には、無節の縄文が施されている。縄文の施文方向は表面・裏面では縦方向が主体的であるが、磨耗が進行しているため撚りは不明である。東北地方での類例や遺構出土土器から、堀之内2式期の所産と考える。¹⁾214はつまみ部の欠損する蓋形土製品のミニチュアと思われる。内面には、細くかつ比較的鋭利な棒状工具による渦巻文または同心円文が施される。表面の色調は橙褐色を呈し、胎土の色調はつまみ部の欠損した部位は灰褐色、それ以外は表面の色調と変わらない。砂粒をやや多く含む、白色鉱物粒（径0.5mm～1mm程度）をわずかに含む。

オ 石製品（第14図、図版10）

215・216は軽石製の石棒片である。同一材質であり、本来は同一個体であった可能性が高い。くすんだ灰茶色を呈する。海綿状を呈し、気孔の径は細かいものが主体である。白色鉱物粒（1mm～5mm）の混入

遺構番号	土 器 片 重 量										土製品等重量	底 部 重 量					総重量	最 低 個 体					
	I	II A	II B	II Ba	II Bb	III	IV	V	VI	不明		I	II	III	IV	V		VI	計	I	II	III	IV
1							6			120	20		12				158						
2					89					760			36				885						
6		820	3,320	70	1,240	560	660	100	32,120	9		1,227					40,126		1.88				
7		110	2,300	140	1,560	1,470	990		19,120	79	47	860		130			26,806	0.13	2.63				1.00
8					120			40	1,180				70				1,410					1.00	
9		90	530		1,400	280	70		5,770			350					8,490		0.50				
10		120			90				140			50					400						
11	470	790	1,080	90	5				2,640		40	440					5,555		1.25				
12								44	240								284						
15			572		130				1,060								1,762						
16		38	370		340		30	62	1,250			60	74				2,224						
17		640				54	51	40	2,000			44					2,829						
18			160	16	52	15	23		1,450			198	26				1,940		0.13	0.13			
19			65		151		43		740			631					1,630		1.25				
21			430			4		3	760	187							1,384						
22							64		80								144						
23									170								170						
P-7			15														15						
P-8									12								12						
1A-15		28	100		88		30		2,560	41							2,847						
1A-25			236		480	154	650		2,800	33		30					4,383						
1A-26			155		97	14	93		1,100			144	14				1,603		0.13				
1A-36					104				350			53					507						
1A-37									330								330						
1A-39			270		54	50	33	43	1,070	29		115					1,664		0.13				
1A-45・46			210		760	110	19		2,590			78					3,767						
1A-56									130								130						
1A-68		23	225		250	16	121	10	2,510			142					3,297		0.88				
1A-78		21	22		13				330	9							395						
1A-79									320								320						
1A-89									900								900						
1A-99			60		24				360	35		24					503						
1B-09					122	15	220	11	1,100			13					1,481						
2A-90									65								65						
2A-91			54		97	20	72		320								563						
2B-00		24	100			39	10		830								1,003						
2B-01					27				180								207						
2B-10		32	84		40	14	60		1,230			61					1,521		0.13				
2B-11		110	185						610								940						
2B-13		240	46	23	110				1,050			210					1,679		1.00				
2B-21					18		15		30								63						
2B-22		47	21		18				240								326						
2B-23			35					34	470								539						
2B-30			60				47		170								277						
2B-33			580		76	38	15	34	1,610	13		43					2,409						
2B-34					61				120								181						
2B-85		64	470		202	42	145		1,590								2,513						
2B-86									110								110						
2B-96			130				25		500								655						
2C-06							28		37								65						
2C-07			96		132	9			480			41					758						
2C-38			36		48	13	26		660								783						
2C-48									80								80						
2C-59	29	170	185	55			20		1,630			70					2,159						
3C-50		210	240						590								1,040						
3C-61									180								180						
3C-70									240								240						
3C-81									410								410						
3C-82			123				43		820			25					1,011						
3D-13									3								3						
3D-88								18	340			25					383						
計	499	3,577	12,565	394	7,998	2,917	3,609	474	0	100,657	455	87	4,982	170	130		138,514	0.13	9.88	1.13	1.00		

第1表 縄文土器集計表

(単位 重量 g)

が目立ち、ガラス質のくすんだ黒色鉱物粒（1mm前後）が量的に次ぐ。215は縦方向に欠損しており全体の形状は不明であるが、石棒の中央部辺りに相当しようか。216は先端部でくびれがあり、扁平な形状に仕上げられている。このほか、10号土坑から緑泥片岩製の石製品が出土している。風化による脆弱化が著しく、本来の形状を留めておらず、図示不可能であった。残存長約11cm、残存径4cmのもので、おそらく石棒であったろうと思われる。

カ 石器（第14・15図、図版10）

本遺跡から出土した石器類の総点数は47点であるが、うち43点を図示した。217～252のうち238は楔形石器、242は削器、233、250は二次加工のある剥片であり、ほかはすべて無茎石鏃である。石鏃の完形品は219、223、226、231、241、245であり、ほかは未成品及び欠損品である。253、254、256は凹石、255、257、259は^{すりいし}磨石、258は打製石斧である。

使われている石材は

黒曜石 217、218、223、225～258、231、233、236～240、242～245、248～251

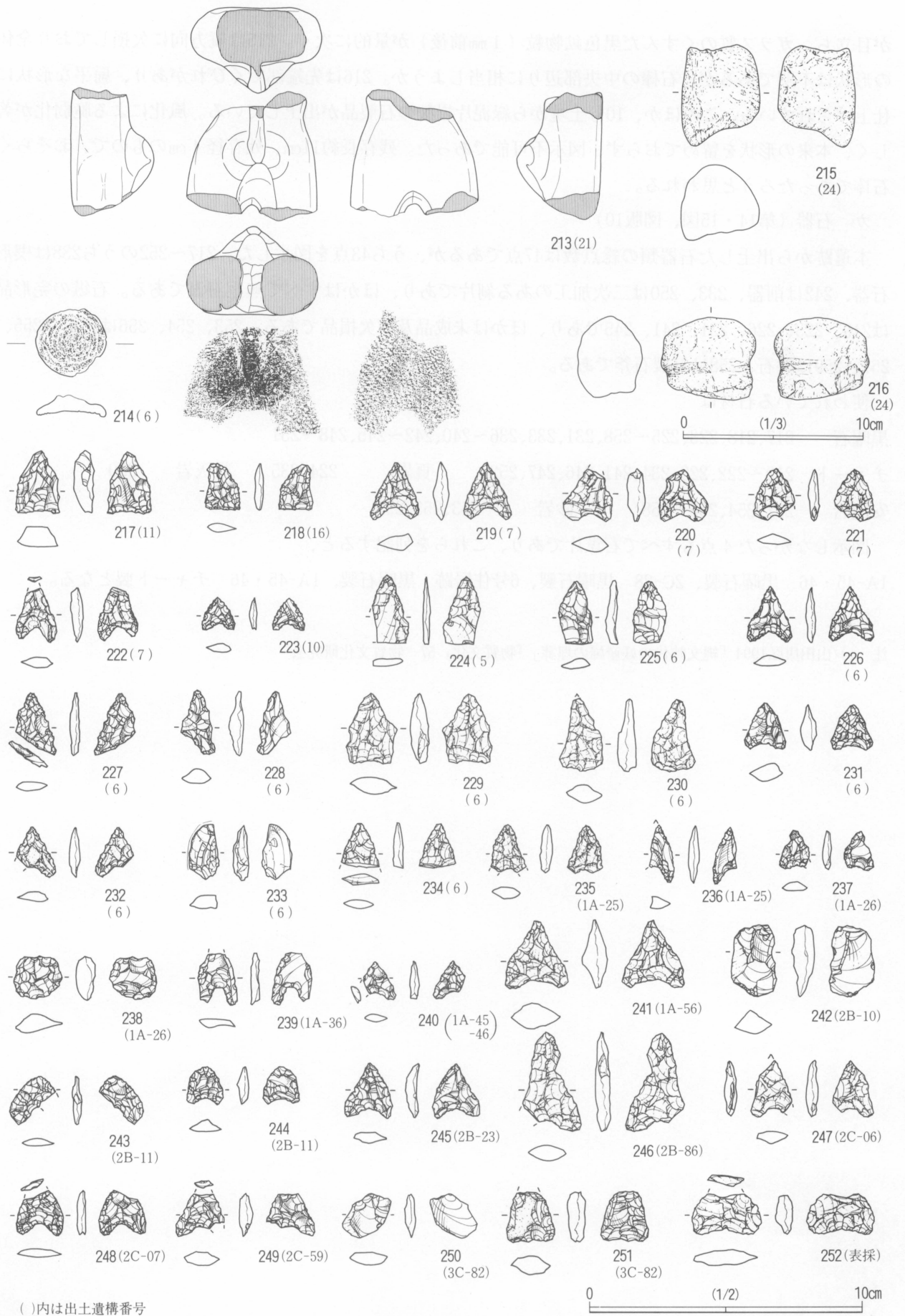
チャート 219～222、229、234、241、246、247、252 頁岩 224、235 凝灰岩 230

安山岩 232、254、256～258 砂岩 253、255、259

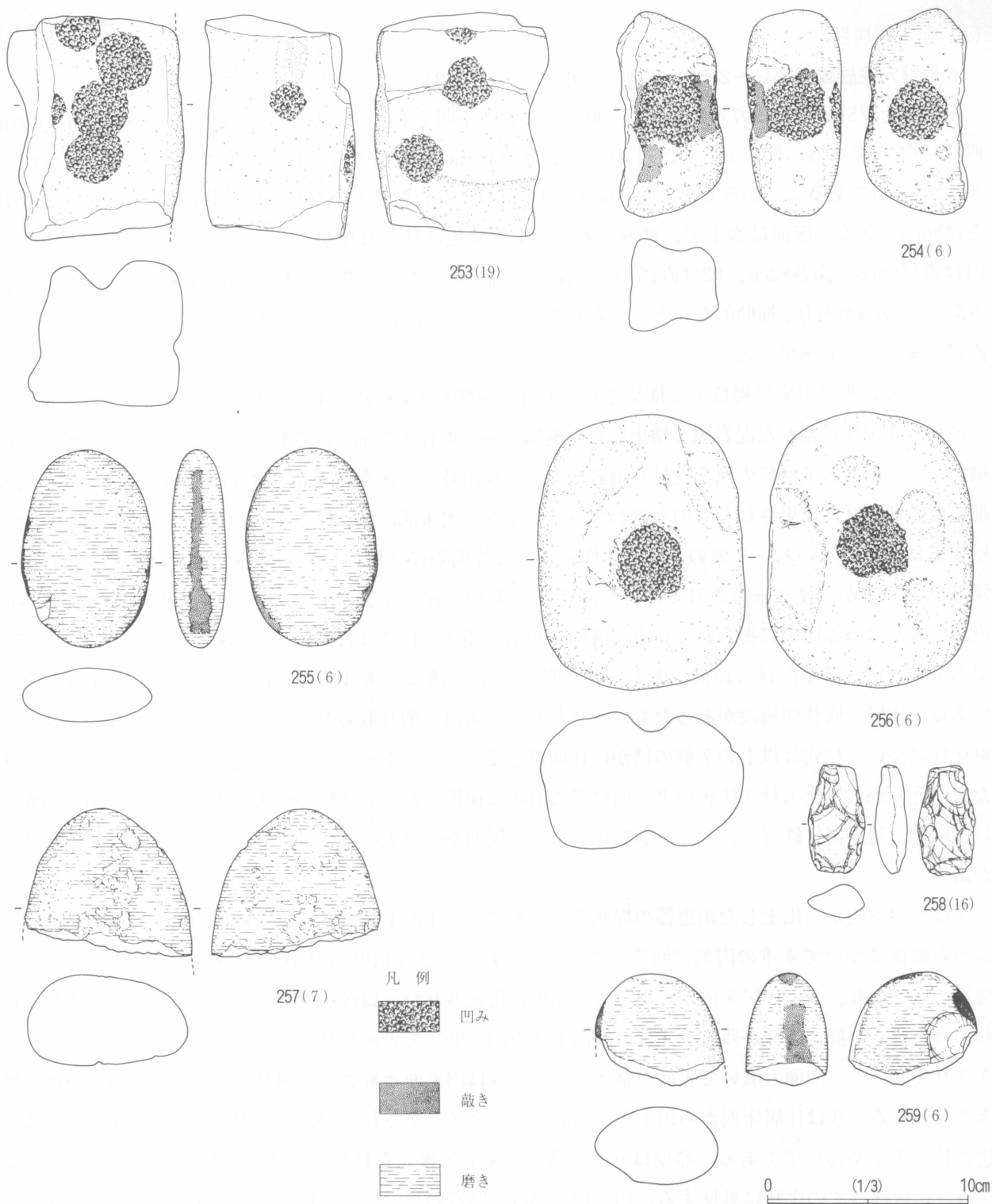
図示しなかった4点もすべて石鏃片であり、これらを列記すると、

1A-45・46 黒曜石製、2C-28 黒曜石製、6号住居跡 黒曜石製、1A-45・46 チャート製となる。

注 1) 山田康弘1994「縄文時代の妊産婦の埋葬」『物質文化』57 物質文化研究会



第14図 縄文時代土製品・石器(1)



第15図 縄文時代石器(2)

2 古墳時代 (第3図)

調査区中央から南部にかけて、竪穴住居跡2軒、土坑1基、溝1条が検出された。歩道建設事業であることから幅の狭い調査区であったが、大型の6号住居は遺存している部分は全体を掘ることができた。20号住居は遺構の大半が調査区外である。調査区の北部からは羽口、鉄滓など製鉄関連遺物が出土した。

(1) 竪穴住居跡

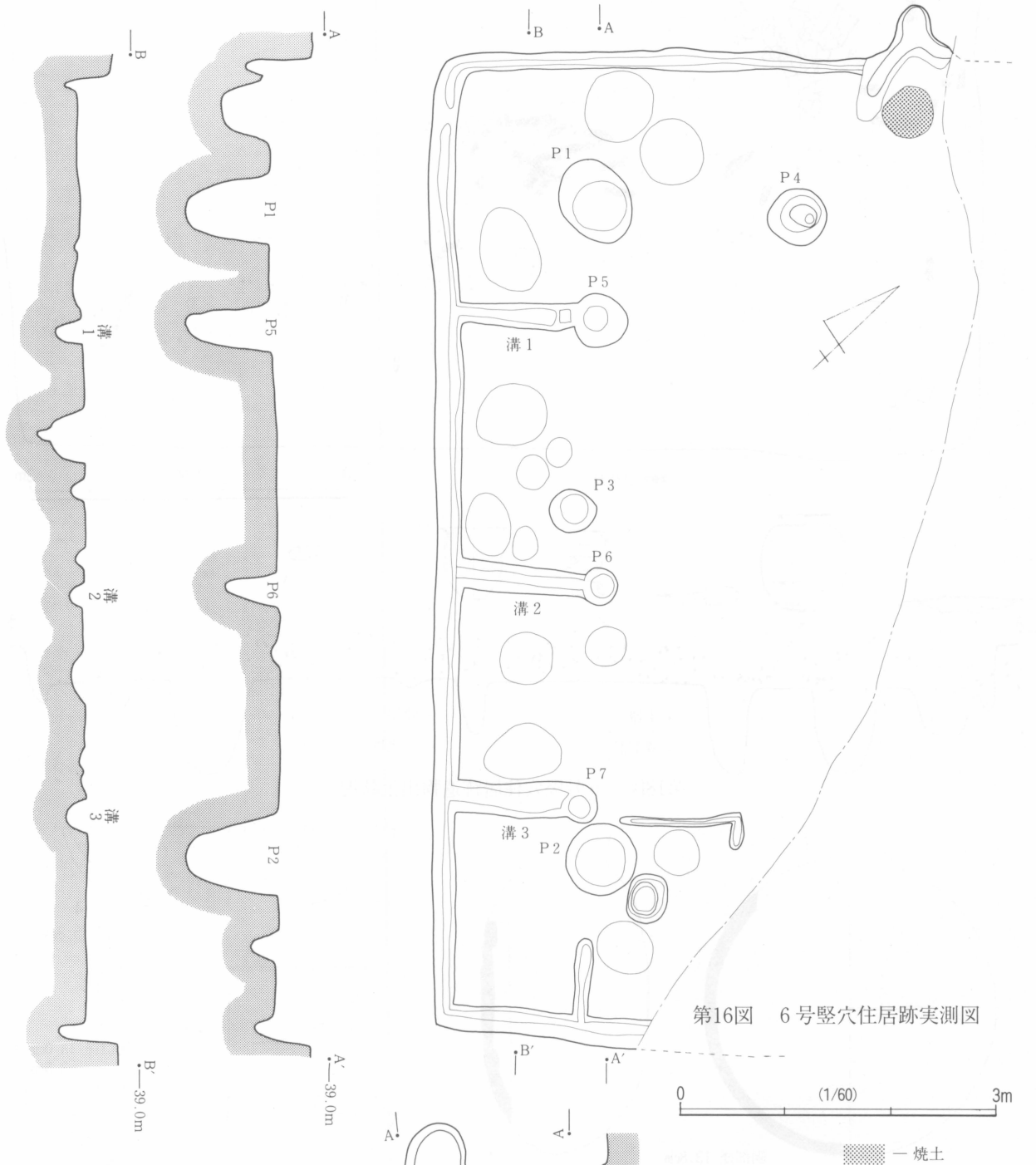
6号竪穴住居跡（第16～21図、図版2・6・7・11・12）

遺構の約3/5は現国道297号により削り取られていて不明であり、調査できたのはカマドを含む住居の南西部分約2/5である。確認できた西辺は9.0m、北辺4.5m、南辺2.2mである。北辺の隅からカマドの中心までが4.5mであることから、平面形は1辺9.0mの正方形をしていたものと思われる。確認面からの深さは36cmである。床面は水平で、踏みしめ等による硬化は見られなかった。主柱穴は2基確認できた。P1は直径65cm、深さ82cm、P2は直径75cm、深さ87cmであった。2基の主柱穴のほぼ中間に直径40cm、深さ33.5cmのP3があり、補助的な柱と考えられる。また、カマドから南西1mの位置に柱穴P4が認められる。直径53cm、深さ42cmである。

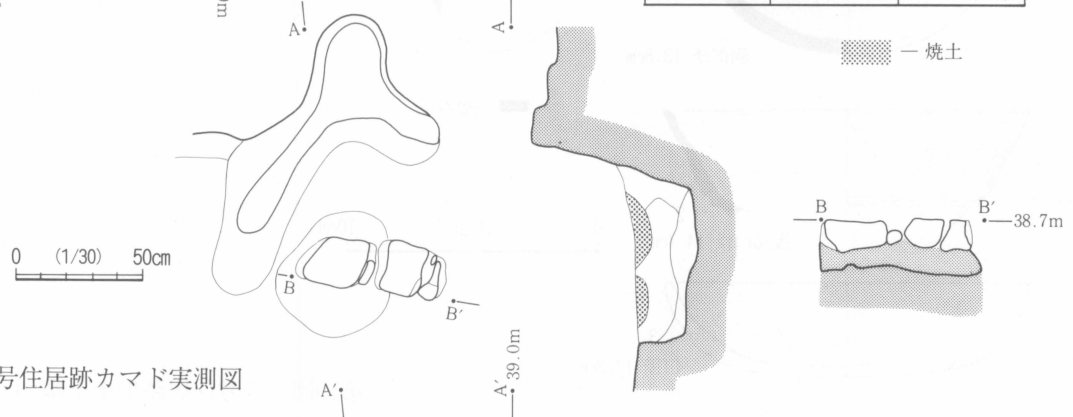
カマドは、北辺中央に褐色土で構築されており、東側1/2は前記の通り削平されている。カマド前部から横長の3個体に割れた泥岩塊を検出した。横幅55cm、奥行き20cm、高さ13cmである。上面の北側に焦げ痕があり、前面と下面に火熱を受けた痕跡があり、検出時の床面からの高さは10cmであった。カマド天井部前面の補強材に使用されたものと思われる。カマドの火床部には、厚さ7cmの焼土の堆積が見られた。壁周溝は全周している。2個の主柱穴の間に、ほぼ等間隔に3個の柱穴がある。柱穴は、P5が直径50cm深さ68cm、P6が直径32cm深さ51cm、P7が直径42cm深さ64cmである。各々の柱穴から西壁に向けて3本の直線の溝がほぼ等間隔に掘られている。溝幅は20cm～35cmで長さは1.07m～1.15m、深さは22cm～28.5cmである。北壁～溝1間は2.15m、溝1～溝2間は2.2m、溝2～溝3間が1.78m、溝3～南壁間が1.78mである。住居の間仕切施設があったものと思われる。国道で削り取られた部分にも、同様の施設があった可能性は高い。柱穴は以上の7個のほかに16個確認できたが、重複するほかの遺構のものと思われる。また床面近くから炭化木材が住居中央に向けて放射状に検出された。住居の焼失が考えられる。遺構内からは土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、羽口片のほか、周囲から混入した多量の縄文土器、石器、黒曜石片等が出土した。

1はカマド内から出土した須恵器の^{ていへい}埴瓶で頸部を欠く。正面上部に青白色と灰色の自然釉が見られ、正面から側面にかけて4重の円形に回る列点文が見られる。2は須恵器の^{はそう}甕の口縁部である。3～7は土師器の^{つぎ}坏であり、3は住居床面から出土し、完形に復元された。口縁部をナデで調整しており、下位に段状の稜を持ち一部に赤採が残る。4は口縁部を横方向に磨いて表面を整えている。5は胴から底部はヘラケズリ後磨いて、内面も磨いて表面を整えている。6は内外面とも磨いて調整している。7も内外面に磨きが見られる。8は住居床面から出土し、全面にヘラケズリがされるが、胴部の一部にタタキ目が残る須恵器技法の土師器の^{かめ}甕である。器壁は6mmと薄い。完形に復元された。9は土師器の^{こしき}甗で胴部がやや膨らみ、口縁部はくの字状に外反する。10、12、13は土師器の甕である。10は底部及び内外面をヘラケズリで表面を整えている。11は土師器の椀で、内外面を磨いて表面を整えている。12は口縁部が緩やかに開いており、外面をヘラケズリで整えている。13は胴部が緩やかに膨らみ、内外面はヘラケズリで表面を整えている。器壁が厚い。14～21は大型の管状の^{どすい}土錘である。いずれも端部を欠損しており、全長は不明であるが、8cm程度の長さに復元できる。外径は、2.5cm前後と共通しているが、孔径は5mm～1cmとやや差がある。外面はヘラナデされる。22は鉄^{てつそく}鏃で有茎平根の五角形式のものである。身は両丸造で、関は両関である。茎部の先端部を欠損するが、比較的遺存状態は良好である。遺存長10.7cm、重さ15.7gを測る。23、24は鉄製刀子で両関である。身はほぼ完存するが、茎部の先端部分を欠損する。身には木質が付着してい

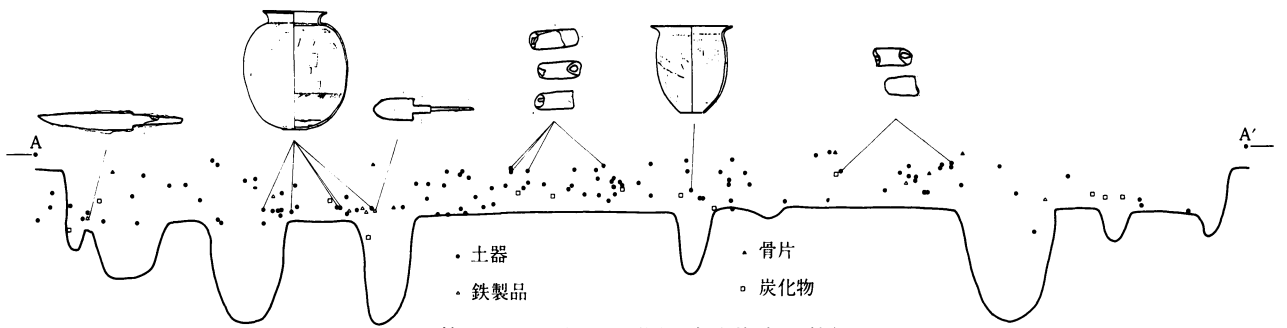
る。遺存長15.2cm、重さ32.86gを測る。銹化が著しい。24は刀子の身の先端部分の破片である。遺存長4.3cmを測る。銹化が著しい。



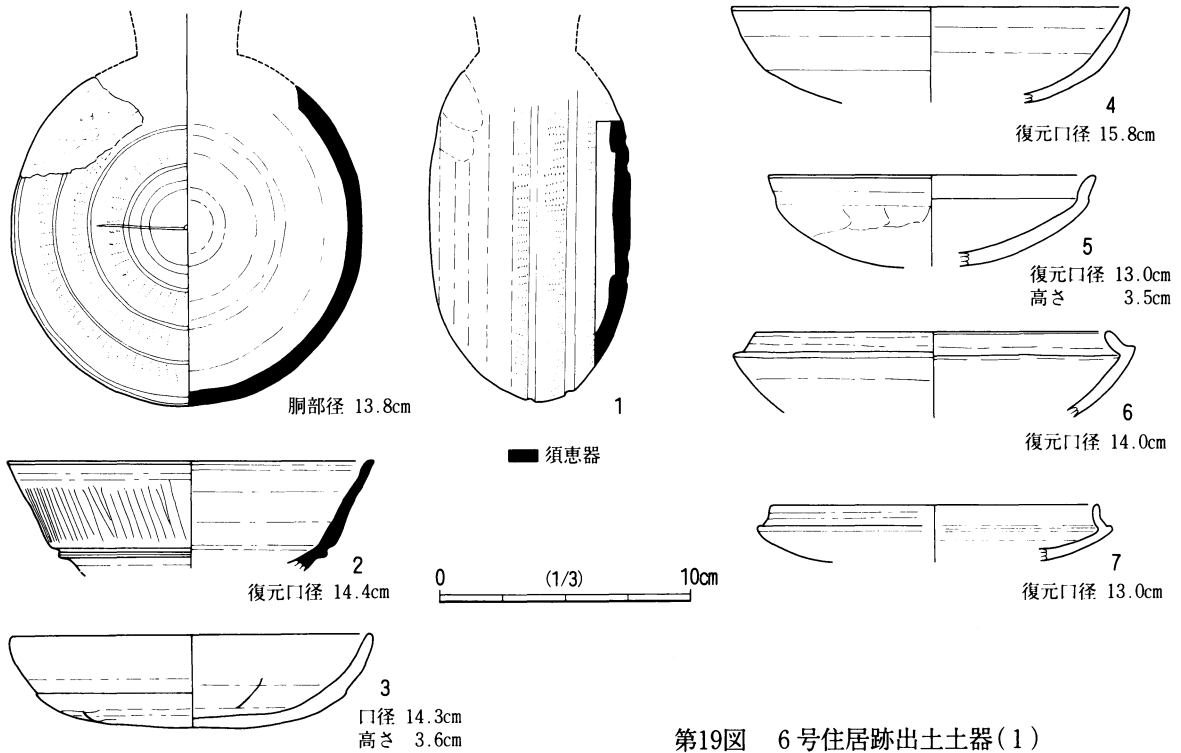
第16図 6号竖穴住居跡実測図



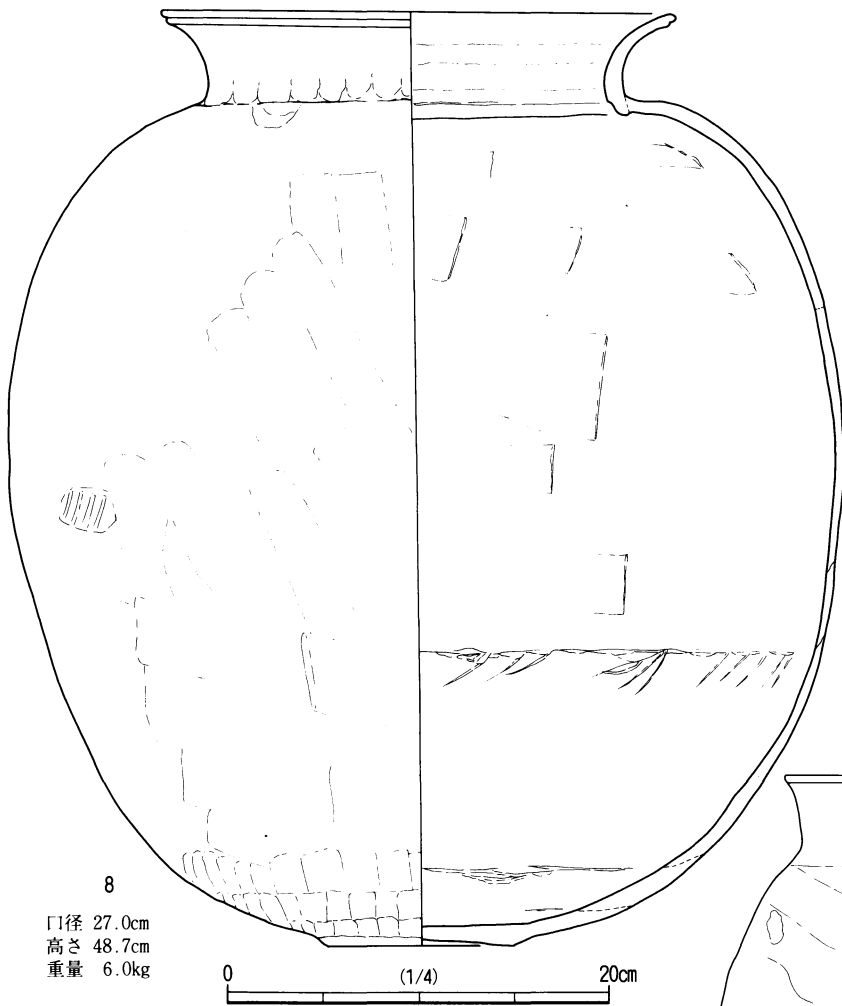
第17図 6号住居跡カマド実測図



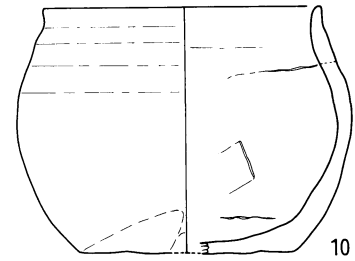
第18図 6号竖穴住居跡遺物出土状況



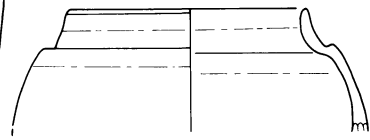
第19図 6号住居跡出土土器(1)



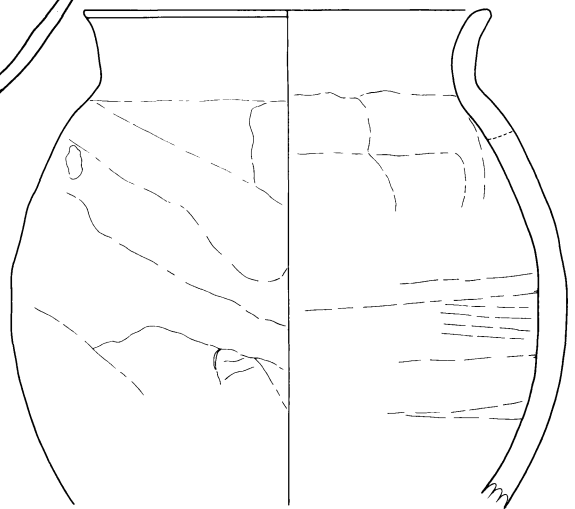
8
 口径 27.0cm
 高さ 48.7cm
 重量 6.0kg



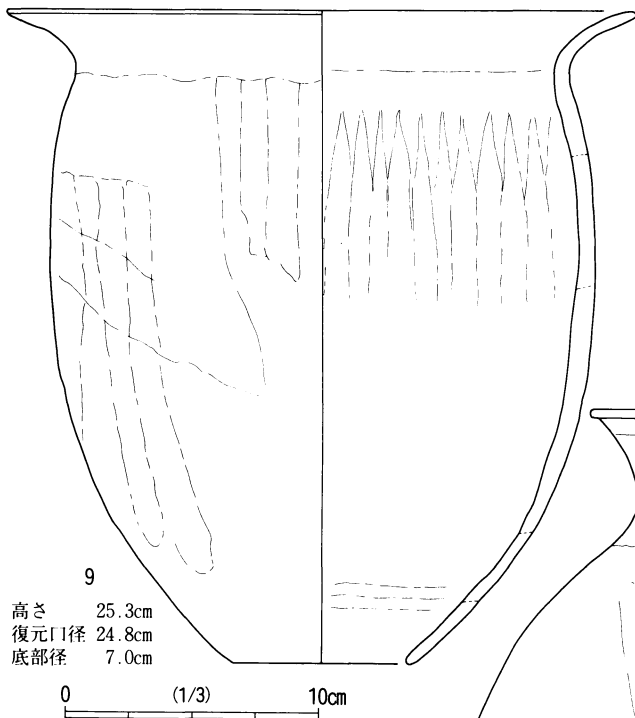
10
 復元口径 10.9cm
 高さ 9.7cm



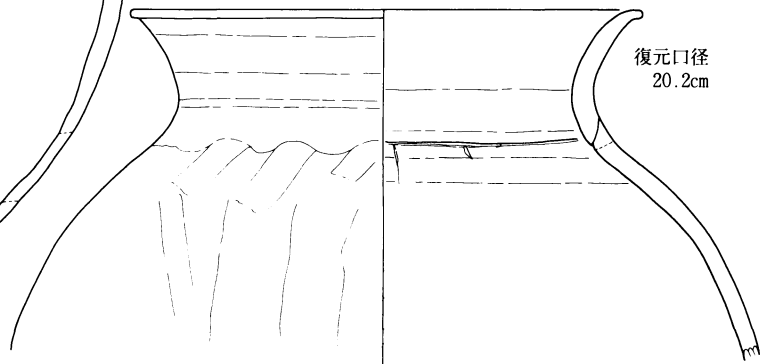
11
 口径 9.4cm



12
 口径 16.0cm



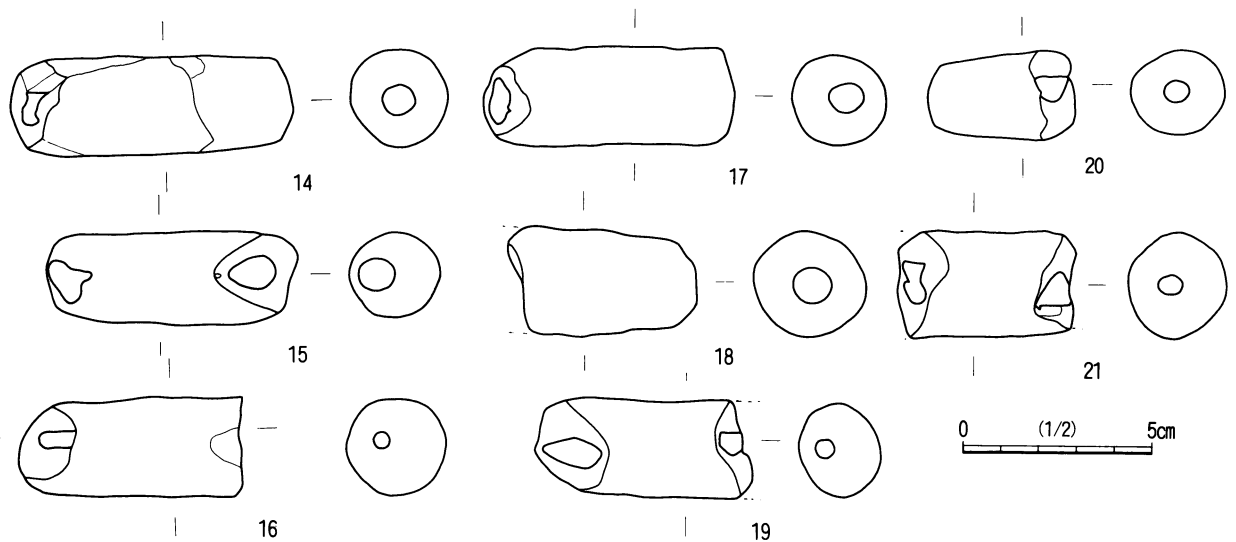
9
 高さ 25.3cm
 復元口径 24.8cm
 底部径 7.0cm



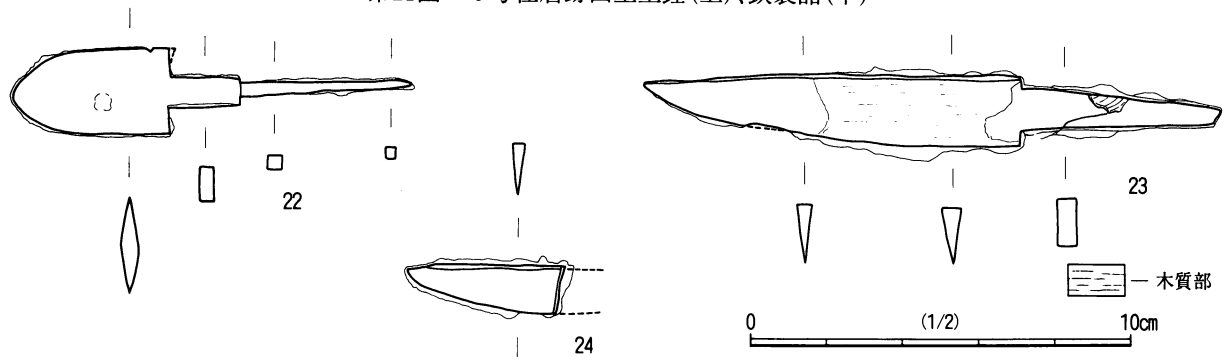
復元口径
 20.2cm

第20図 6号住居跡出土土器(2) (縮尺 8:1/4、以外:1/3)

13

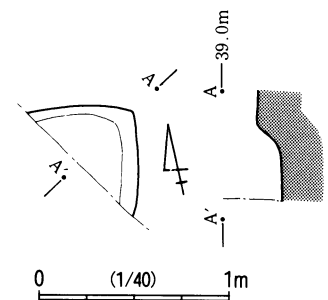


第21図 6号住居跡出土土錘(上)、鉄製品(下)



20号竪穴住居跡(第22図、図版7)

遺構のほとんどが調査区外である。調査できたのは北辺が85cm、東辺が82cm、確認面からの深さが22cmである。断定するのは難しいが、竪穴住居跡の可能性が高い。6号住居と極めて近接しているので、6号と同時期ではなく、その前か後の時期になると思われる。少量の土師器の小片が出土したが、図示できるものはなかった。



第22図 20号住居跡実測図

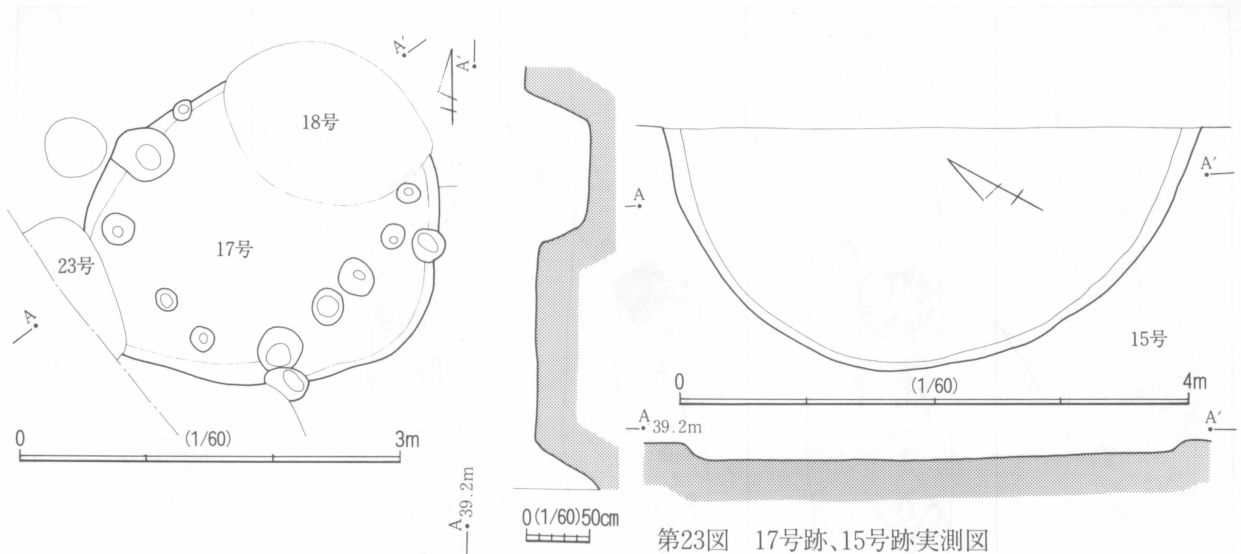
(2) 竪穴状遺構

17号跡(第23図、図版4)

平面形はほぼ円形を呈し長径3m、短径2.6m、確認面からの深さは14cmである。東側で18号跡と、西で23号跡と重複しており、17号が古い。小さな穴が11基壁際をめぐる。直径は16cm~47cm、深さは16cm~33cmである。底面は平坦で、炉はなく、床面の硬化は見られない。遺構内から羽口片が出土した。

15号跡(第23図)

遺構の約1/2が調査区外であるが、平面形は円形になると思われる。確認できた直径が4.2mで、確認面からの深さは11cmである。底面は平坦で、炉はなく、床面の硬化は見られない。遺構内から羽口片、ガラス質滓が出土した。



第23図 17号跡、15号跡実測図

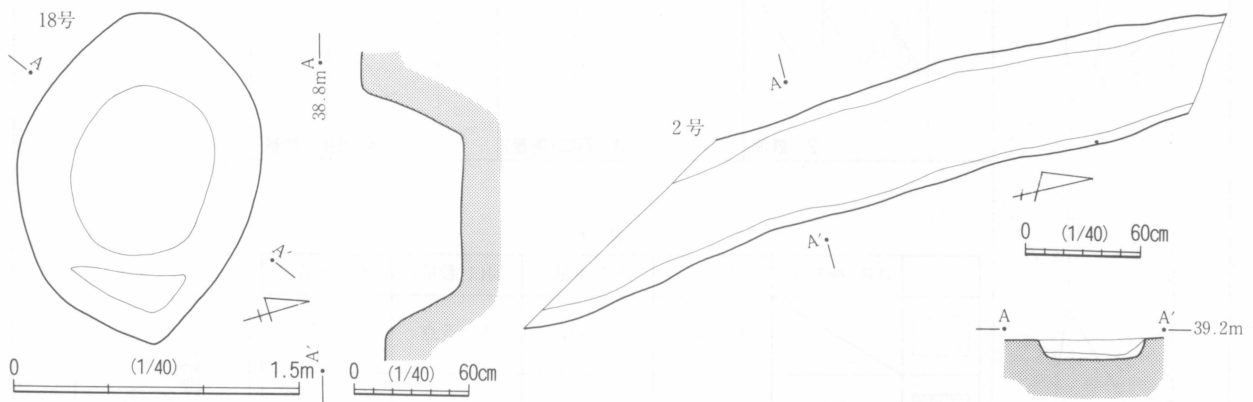
(3) その他の遺構

18号土坑 (第24・26図、図版8・12)

平面形が楕円形で、長径1.55m、短径1.25m、確認面からの深さ54cmの土坑である。底面は平坦で、断面形は逆台形である。覆土の中位からほぼ完形の羽口が出土した。ほかには1点の土器片のみの出土であった。

2号溝 (第24図、図版8)

ほぼ南北方向に伸びる上端幅1.22m、下端幅0.9m、確認面からの深さ20cmの浅い溝の一部である。確認できた長さは8.2mである。南北の調査区外にのびていると思われるが、北側は、国道297号により削り取られている。底面は平坦で、断面は逆台形である。13点の土師器片が出土したが、図示できるものはない。



第24図 18号土坑、2号溝実測図

(4) 製鉄遺物 (第25・26図、第2～4表、図版12)

製鉄関連遺物は、6号住居跡、15号・17号遺構・18号土坑及びグリッドから出土している。しかしながら、大半は覆土中層から上層で検出されており、製鉄に伴う焼土などを伴った遺構はなかった。

第26図は製鉄関連遺物出土分布図である。1は鉄塊系遺物と^{てっかい}椀形滓の^{わんがたさい}出土地点を示しており、鉄塊系遺物が図の南北端から出土し、椀形滓が中央の6号住居跡から出土している。2は鉄滓の出土重量別分布図であり、6号住居跡と2C-38グリッドから出土し、特に6号住居跡の北側に集中している。3、4は羽口の出土分布図であり、3が重量別、4が数量別分布図である。17号遺構・18号土坑、6号住居跡、2B



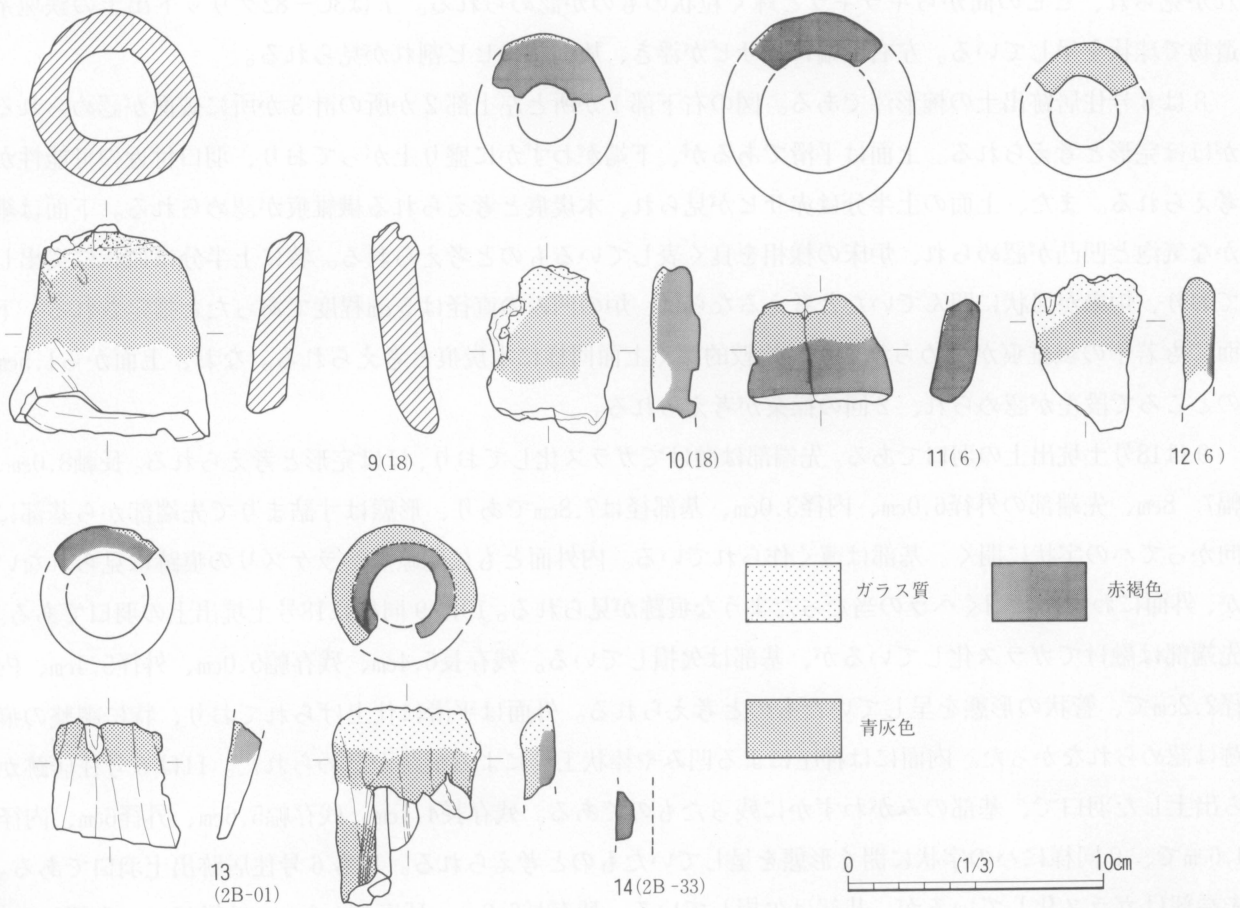
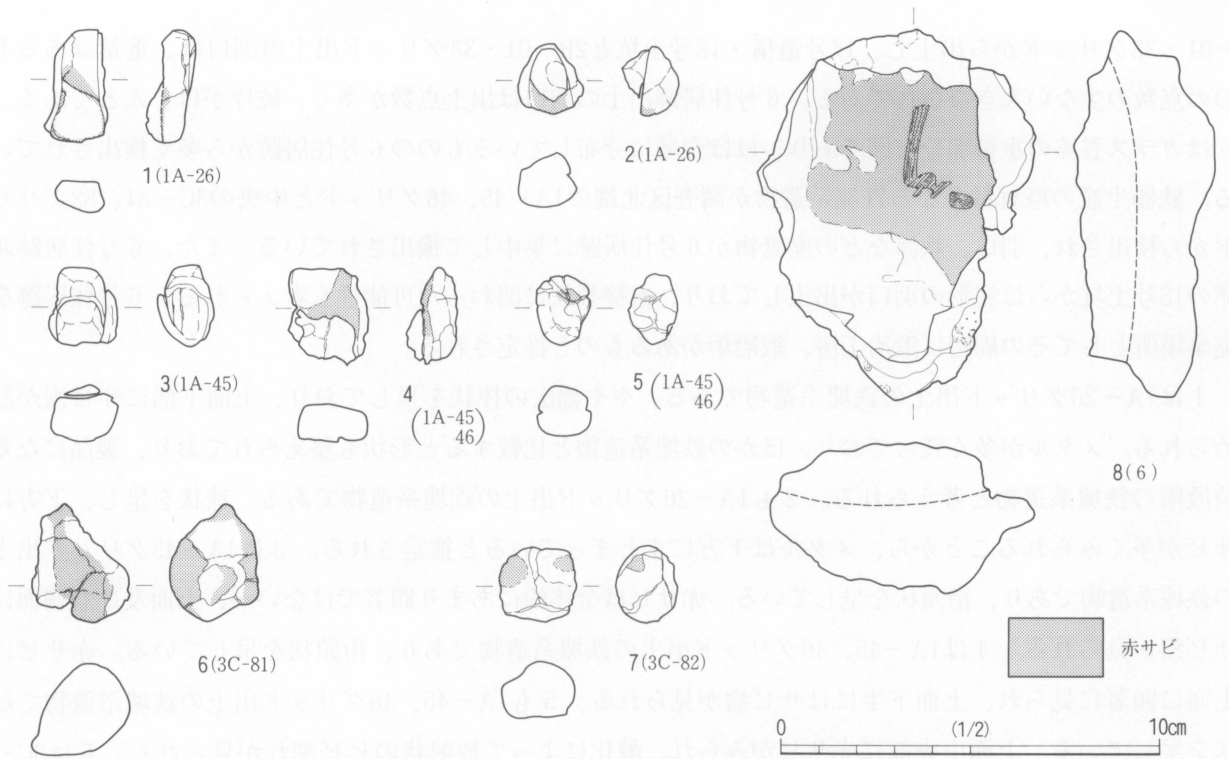
第25図 製鉄関連遺物分布図

ー01・33グリッドから出土し、17号遺構・18号土坑と2Bー01・33グリッド出土の羽口は、重量はあるものの点数の少ない大きな個体である。6号住居跡出土の羽口は出土点数が多く、破片がほとんどである。5はガラス質滓の重量別分布図であり、ほぼ全域に分布しているものの6号住居跡から多く検出されている。鉄器生産の原材料となる鉄塊系遺物が調査区北端の1Aー45、46グリッドと中央の3Cー81、82グリッドから検出され、羽口、鉄滓などの廃棄物が6号住居跡に集中して検出されている。また、6号住居跡北側の18号土坑からは完形の羽口が出土しており、直接製鉄に関わった可能性も考えられる。6号住居跡を廃棄場所としてその周辺に鍛冶工房、鍛冶炉があるものと推定される。

1は1Aー26グリッド出土の鉄塊系遺物である。やや幅広の棒状を呈しており、上面下部にサビ瘤が認められる。メタルが多く残っており、ほかの鉄塊系遺物と比較すると形状も整えられており、製品になる前段階の鉄塊系遺物と考えられる。2も1Aー26グリッド出土の鉄塊系遺物である。球状を呈し、下方にサビが多くみられることから、メタルは下方にまとまっていると推定される。3は1Aー45グリッド出土の鉄塊系遺物であり、指頭状を呈している。赤サビは全体的にあまり顕著ではないが、上面及び右側面にサビ瘤が見られる。4は1Aー45、46グリッド出土の鉄塊系遺物であり、指頭状を呈している。赤サビは上面に顕著に見られ、上面下半にはサビ瘤が見られる。5も1Aー45、46グリッド出土の鉄塊系遺物で球状を呈している。上面中央部に赤サビがみられ、酸化によって放射状のヒビ割れが見られる。6は3Cー81グリッド出土の鉄塊系遺物で、やや大きめの球状を呈している。全体に赤サビが浮き、放射状のヒビ割れが見られ、ヒビの間からキラキラと輝く粒状のものが認められる。7は3Cー82グリッド出土の鉄塊系遺物で球状を呈している。左右上端に赤サビが浮き、放射状のヒビ割れが見られる。

8は6号住居跡出土の椀形滓である。図の右下部1か所と左上部2か所の計3か所に破面が認められるがほぼ完形と考えられる。上面は平滑であるが、下端がわずかに盛り上がっており、羽口付近の可能性が考えられる。また、上面の上半分は赤サビが見られ、木炭痕と考えられる繊維痕が認められる。下面は細かな気泡と凹凸が認められ、炉床の様相を良く表しているものと考えられる。特に上半分は皿状に突出しており、炉床が皿状に凹んでいたと考えるならば、炉の凹みの直径は5cm程度であったと推定される。下面にも若干の繊維痕が認められるが、比較的深く上面同様に木炭痕と考えられる。なお、上面から1.5cmのところ段差が認められ、2回の操業が考えられる。

9は18号土坑出土の羽口である。先端部は融けてガラス化しており、ほぼ完形と考えられる。長軸8.0cm、幅7.8cm、先端部の外径6.0cm、内径3.0cm、基部径は7.8cmであり、形態は寸詰まりで先端部から基部に向かってハの字状に開く。基部は薄く作られている。内外面ともに明瞭なヘラケズリの痕跡は見られないが、外面にわずかに細くヘラの当たったような痕跡が見られる。10は9同様に18号土坑出土の羽口である。先端部は融けてガラス化しているが、基部は欠損している。残存長6.4cm、残存幅5.0cm、外径5.4cm、内径2.2cmで、管状の形態を呈していたものと考えられる。外面は平滑に仕上げられており、特に調整の痕跡は認められなかった。内面には押圧による凹みや棒状工具による痕跡が認められた。11は6号住居跡から出土した羽口で、基部のみがわずかに残ったものである。残存長4.1cm、残存幅5.6cm、外径6cm、内径4.6cmで、9同様にハの字状に開く形態を呈していたものと考えられる。12も6号住居跡出土羽口である。先端部はガラス化しているが、基部は欠損している。残存長6.0cm、残存幅4.3cm、外径4.0cm、内径2.6cmで管状の形態を呈していたものと考えられる。13は2Bー01グリッド出土の羽口である。端部は欠損しているが、1と同様にハの字状に開く形態と考えられる。残存長5.0cm、残存幅5.0cm、外径5.2cm、内径3.2



()内は出土遺構・グリッド番号

第26図 製鉄関連遺物実測図

cmである。外面は縦方向のヘラケズリによって整形される。内面は横方向のヘラケズリによって、基部の断面が三角形に細く作り出されている。14は2B-33グリッド出土の羽口である。残存長7.7cm、残存幅5.8cm、外径5.6cm、内径2.6cmである。基部が欠損しているが細身の管状の形態を呈していたものと考えられる。断面状況などから粘土板を二枚又は二重に巻いて作られたものと考えられる。また外面には縦方向のヘラケズリが見られる。なお、基部が青灰色に変色しており、反転して使用された可能性が考えられる。

製鉄関連遺物の出土した遺構で明確な時期が決定できるものは6号住居跡のみである。6号住居跡からは多量の羽口、椀形滓、鉄滓などが出土しているが、前述したように覆土中層から上層にかけて多く出土していることから、6号住居跡と直接関連する可能性は少なく、6号住居跡廃棄後のそれほど時間の経たないうちに捨てられた可能性が高い。本遺跡出土の羽口は基部がハの字状に開くもの(9、11、13)と管状のもの(10、12、14)の2つに分類され、特に前者は比較的古い様相であり、その下限は7世紀前半代と考えられている¹⁾。また、製練系の遺物がなく鍛冶のみを行っていた可能性が強く、県内で製錬が行われる以前のものと考えられることから、現時点では本遺跡の製鉄関連遺物は7世紀前半のものと考えたい。

注 1) 穴沢義功氏御教示による。

番号	出土位置	磁着度	メタル度	長軸長	短軸長	厚さ	重量	破面数	備考
1	1A-26	5	L(●)	2.9	1.6	1.3	10.42	0	棒状鉄片
2	〃	4	H(○)	1.8	1.7	1.5	5.11	0	
3	1A-45・46	5	L(●)	2.0	1.8	1.5	8.57	0	
4	〃	4	H(○)	2.4	2.1	1.3	10.11	0	
5	1A-46	6	N(×)	1.8	1.4	1.3	3.62	0	
6	3C-81	4	H(○)	3.0	2.6	2.3	16.80	0	
7	〃	4	N(×)	2.0	2.0	1.4	8.17	0	

第2表 鉄塊系遺物計測表

番号	出土位置	磁着度	メタル度	長軸長	短軸長	厚さ	重量	破面数	備考
1	6号住北西	6	N(×)	9.7	7.4	3.9	283.22	3	
2	〃	6	N(×)	3.8	2.7	1.7	14.59	1	
3	6号住北東	4	N(×)	3.5	2.9	1.3	6.80	3	

第3表 椀形滓計測表

番号	出土位置	磁着度	メタル度	長軸長	短軸長	厚さ	重量	破面数	備考
1	6号住北西	3	N(×)	3.0	2.6	2.2	14.40	0	
2	〃	3	N(×)	2.0	1.6	1.3	5.95	2	
3	〃	2	N(×)	1.5	1.1	1.0	2.06	0	
4	6号住北東	6	N(×)	3.4	2.3	2.1	18.53	3	
5	〃	6	N(×)	3.3	2.1	1.5	12.22	1	
6	〃	3	N(×)	2.2	2.0	2.2	8.97	0	
7	〃	3	N(×)	2.2	1.7	1.3	4.24	0	
8	〃	2	N(×)	2.5	1.8	1.2	4.08	0	
9	〃	3	N(×)	2.1	1.7	1.4	5.51	3	
10	6号住南西	4	N(×)	2.6	2.0	2.0	12.26	2	
11	6号住南東	3	N(×)	2.1	1.7	1.4	4.43	0	
12	〃	4	N(×)	2.2	1.7	1.4	5.87	0	
13	〃	3	N(×)	2.1	1.2	1.2	2.74	2	
14	2C-38	6	N(×)	3.1	1.8	1.4	8.21	0	

第4表 鉄滓計測表

(単位 長さ cm、重量 g)

3 時期不明の遺構と遺構外出土遺物

(1) 遺構

12号竪穴状遺構（第27図、図版8）

この遺構もほとんどの部分は調査区外である。調査できたのは、東西辺は95cm、南北辺2.5m、深さは52cmであり、竪穴住居跡の可能性も否定しきれない。コーナー部に幅30cm、底面からの深さ10cmの溝が掘られている。少量の土器器片が出土しているが、図示できるものはない。

14号柱穴列（第27図、図版8）

ほぼ南北に並ぶ4基の柱穴列で、北からP1が直径70cm、深さ44.6cm、P2は直径65cm、深さ47.5cm、P3は直径75cm、深さ75cm、P4は直径40cm、深さ15.4cmである。柱穴間の距離はP1-P2間1.15m、P2-P3間1.45m、P3-P4間1.1mとなる。南北は調査区外となるため未調査である。遺物は土器小片のみであった。

23号土坑（第27図）

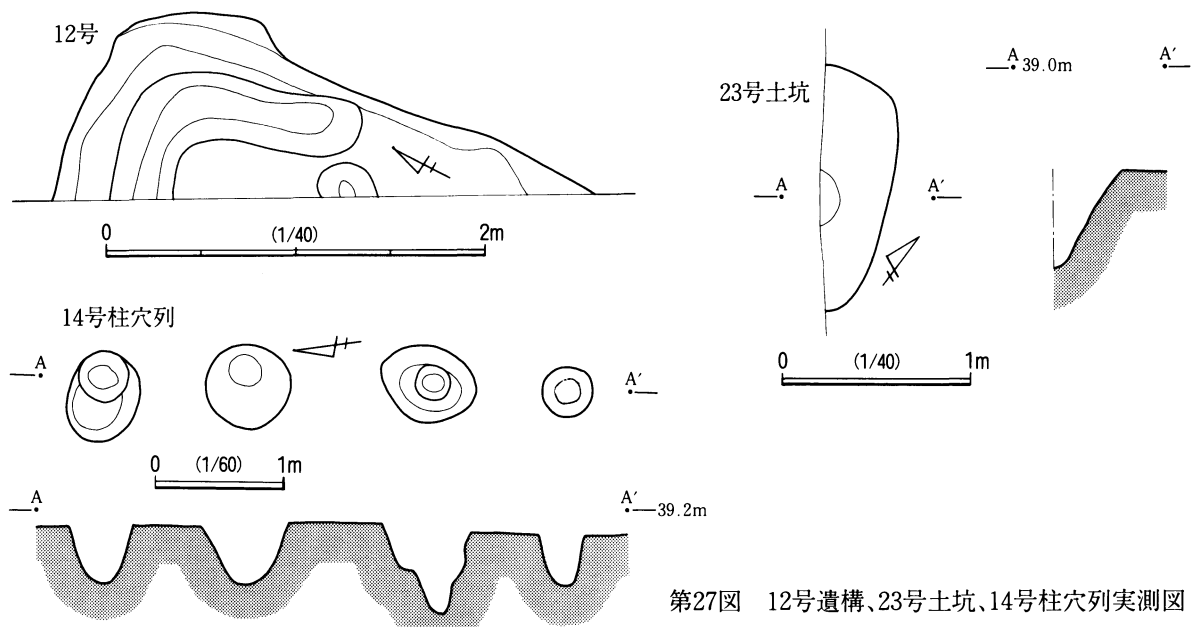
遺構の約1/2は調査区外である。平面形は隅丸長方形になるのであろうか。確認できた長径は1.26m、確認面からの深さは50cmである。断面形は逆台形になろうか。遺物は出土していない。

8号溝（第28図、図版8）

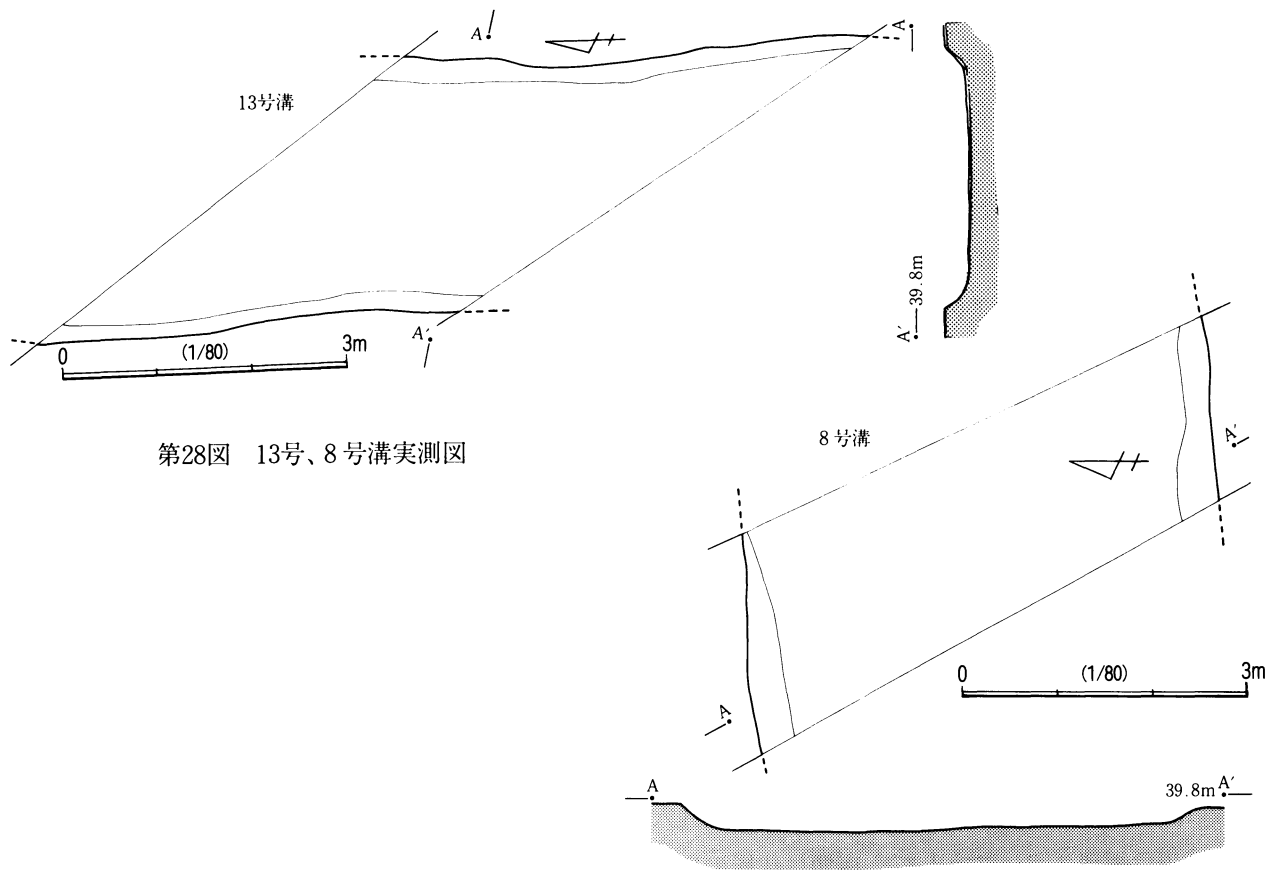
ほぼ東西方向にのびる広くて浅い溝の一部である。幅は5.4m、深さは28cm、確認できた長さは1.9mである。東と西は調査区外のため未調査である。底面は平坦で、断面は逆台形である。次の13号溝と調査区西側でつながっている可能性がある。少量の土器片が出土しているが、周囲からの混入と思われる。

13号溝（第28図、図版8）

ほぼ南北方向にのびる浅い溝の一部である。幅は2.65m、深さ26cm、確認できた長さは8.8mである。南と北は調査区外のため未調査である。底面は平坦で、断面は逆台形である。少量の土器片が出土しているが、小片で周囲からの混入と思われる。



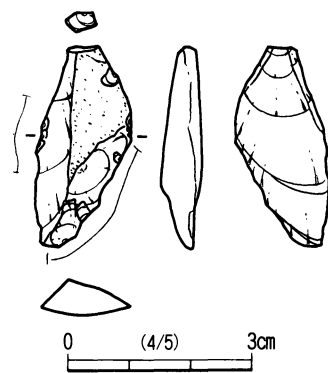
第27図 12号遺構、23号土坑、14号柱穴列実測図



第28図 13号、8号溝実測図

(2) 遺物 (第29図)

旧石器時代の遺物と考えられる石器である。1A-26からの出土で、当該期の遺物はこの1点のみである。頁岩製の縦長の剥片を素材とし、鋭利な両側縁に微調整剝離を施し刃部を作り出している。長さ34mm、幅16mm、厚さ7mm、重量は2.8gである。



第29図 遺構外出土石器

Ⅲ ま と め

国道297号の歩道建設のための事前調査であることから、東西5m、南北120mと細長い調査区を発掘した。視点を変えれば、37,000㎡の市場台遺跡の北東部に幅5mのトレンチを掘り、確認調査を行ったと考えられる。その結果、遺跡は縄文、古墳時代の集落及び生産遺跡であることが確認できた。

縄文時代に関しては、縄文時代前期から晩期の遺物が土器を中心に多量に出土した。遺構は性格が特定できないものが多い。遺物から見ると土偶(町内で16例目、郡内で17例目)のほか、土器片錘、凹石、磨石などの漁労や生活関連遺物が出土しており、調査区外に集落が展開することが予想される。調査区北部から石鏃や黒曜石細片が多量に出土した。36個出土した石鏃の86%は一部を欠損していたり、未完成のものであった。石鏃の製作地であった可能性も考えられる。

弥生時代、古墳時代前・中期の時期の遺物は出土していない。

古墳時代では後期後半期の6号竪穴住居跡が1軒検出された。実際に調査できたのは1軒の2/5ほどであるが、この地域の古墳時代後期後半の様相を知る上で貴重な資料を得ることができた。

6号住居跡の平面形は9m×9mの正方形であったと推定される。床面積は、81㎡(24.5坪)になり、畳敷に直すと49畳になる。住居内は、4本の主柱穴を結んだ線の内側が食事、作業場スペースとして、カマド周辺は調理スペースとして、南側は住居の出入り口として考えられている。残りの空間が、間仕切り施設で4区画に分けられた寝間であると思われ、面積は約10㎡になる。削平されていた東側にも同じような間仕切り施設があった可能性は高く、合計8区画20㎡で6畳ほどになる。仮に1区画に2人と考えると16人となり、中央のスペースも寝間にすることは可能であるから、かなりの大家族も居住可能であったとみられる。また、その時期の規模の大きな集落が調査区外に続いている可能性は大きく、今後の調査成果が期待される。

カマド天井前部に使用されていた泥岩は、南上総地方特有の基盤層である。横穴墓の多くはこの基盤の泥岩をくりぬいてつくられている。泥岩はほかの石材に比べて比較的切り出しやすい。重い甕や甔がかげられた土製のカマドの崩落を防ぐ補強材としたものと思われるが、地域性を感じさせる資料である。

古墳時代の遺物としては、土器のほか、鉄鏃や刀子の鉄製品、漁労具の土錘などが出土した。土錘は13個出土しており、漁労に使われたものであろう。夷隅川までは直線で約1.5kmであり、土錘をつけた漁網を使って川魚を捕って生活していたのであろう。

なお、当遺跡の南端、調査区から100mの位置に、かつて横山1号墳が存在した。明治20年代に小学校建設のため取り崩された際、大刀のほか、房総で最も古い(6世紀前半)とされている金銅装の馬具(鏡板、杏葉)が出土しており、大和政権と密接な関係を持つかなりの勢力の豪族が存在したと考えられる。6号住居跡及び周辺に存在が推定される集落とこの豪族との関連に考慮する必要がある。

製鉄関連遺物の時期は6号住居跡廃棄後の時期と思われ、県内の製鉄遺跡の中でも古い時期になる可能性が高い。製鉄に関連する遺構は検出されなかったが、調査区外に製鉄関連遺構が存在する可能性は高い。当遺跡の北東150mの位置にある奈良・平安時代の鍛冶跡とされる横山峰の台遺跡との関連についても、今後検討する必要がある。



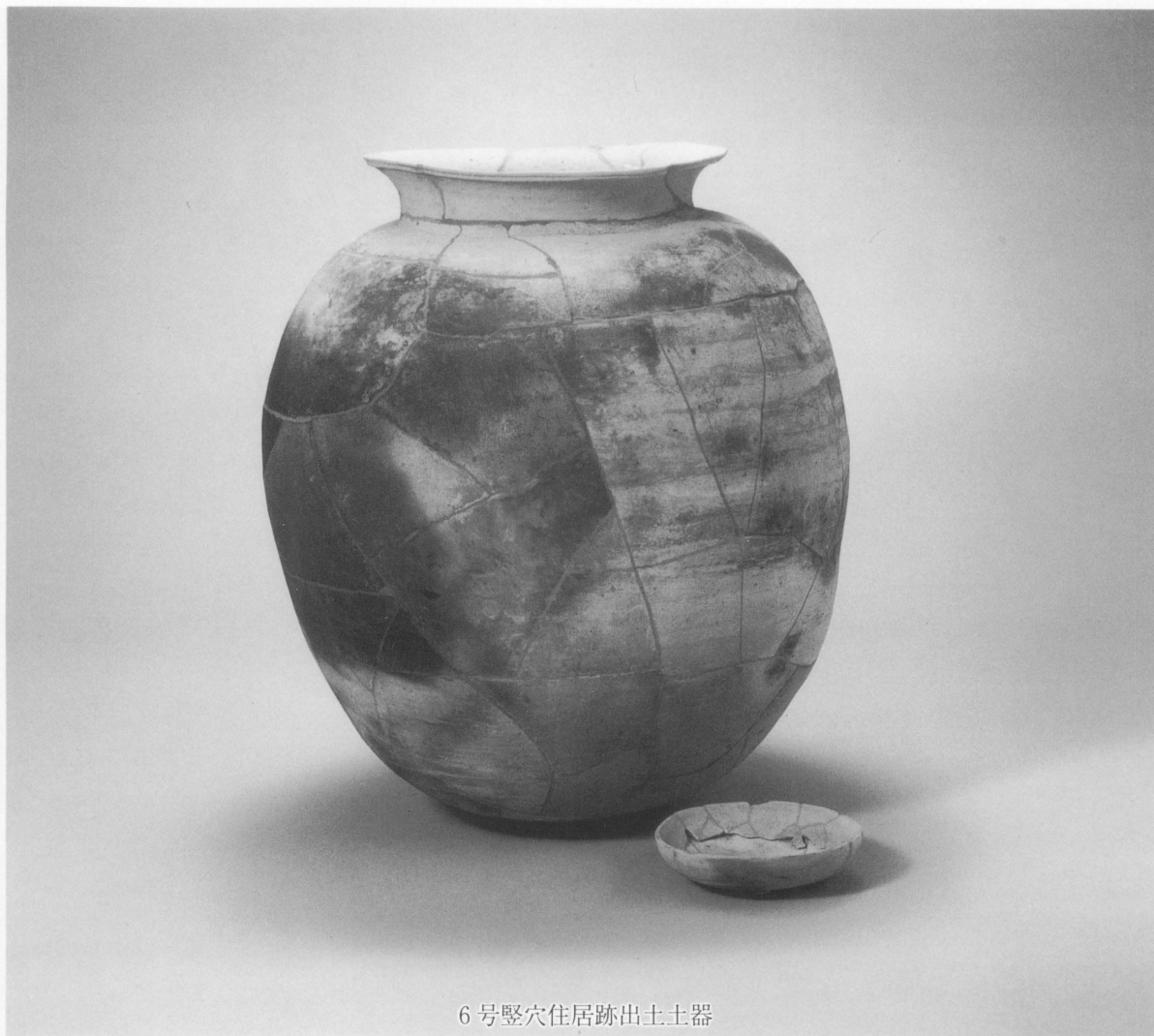
遺跡周辺航空写真

1. 市場台遺跡

- 2. 女ヶ谷遺跡
- 3. 横山堀之内遺跡

- 4. 台古墳群
- 5. 台遺跡
- 6. 高谷古墳群
- 7. 打岡台古墳群

- 8. 打岡台遺跡
- 9. 横山白山台遺跡
- 10. 愛宕山古墳・横穴群
- 11. 船子遺跡



6号竖穴住居跡出土土器



土偶

調査開始前の
市場台遺跡

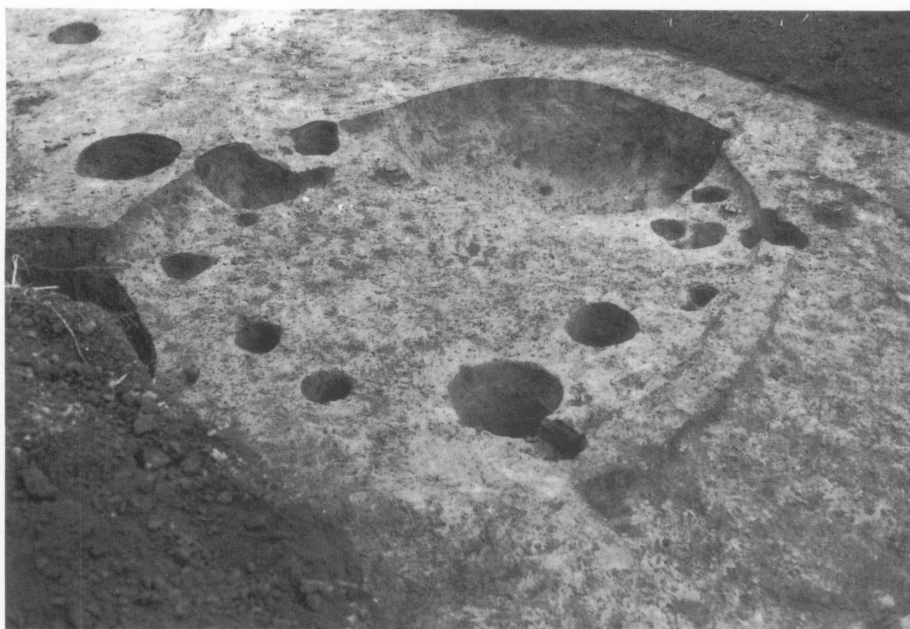


11号 竪穴状遺構



16号 竪穴状遺構





17号竖穴状遺構



17号

21号

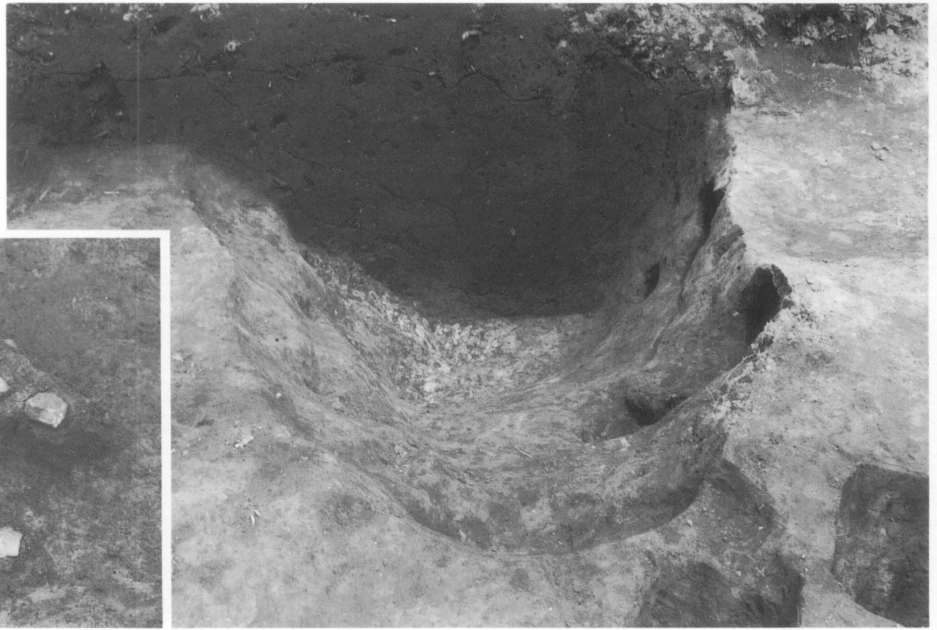
22号

21・22号竖穴状遺構



19号土坑遺物出土状況

7号土坑と
遺物出土状況



10号土坑



9号



6号竪穴住居跡
(右側は道跡に削り取られていた)



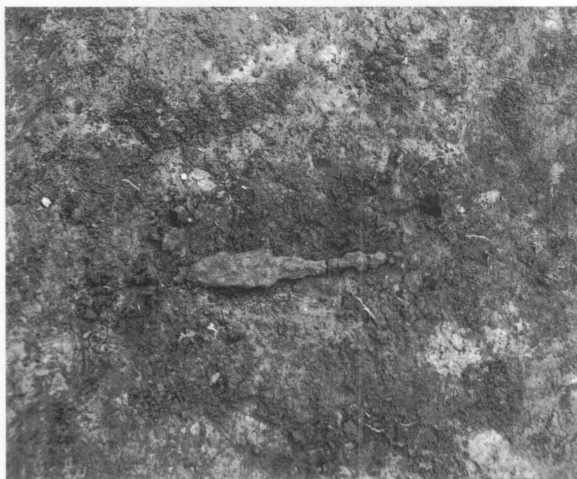
6号住居跡カマド



6号住居跡
甕(かめ)出土状況



6号竖穴住居跡
土器出土狀況



6号住居跡鉄鍬出土狀況



6号住居跡刀子出土狀況



20号竖穴住居跡



12号竪穴状遺構



18号土坑羽口出土状況



2号溝



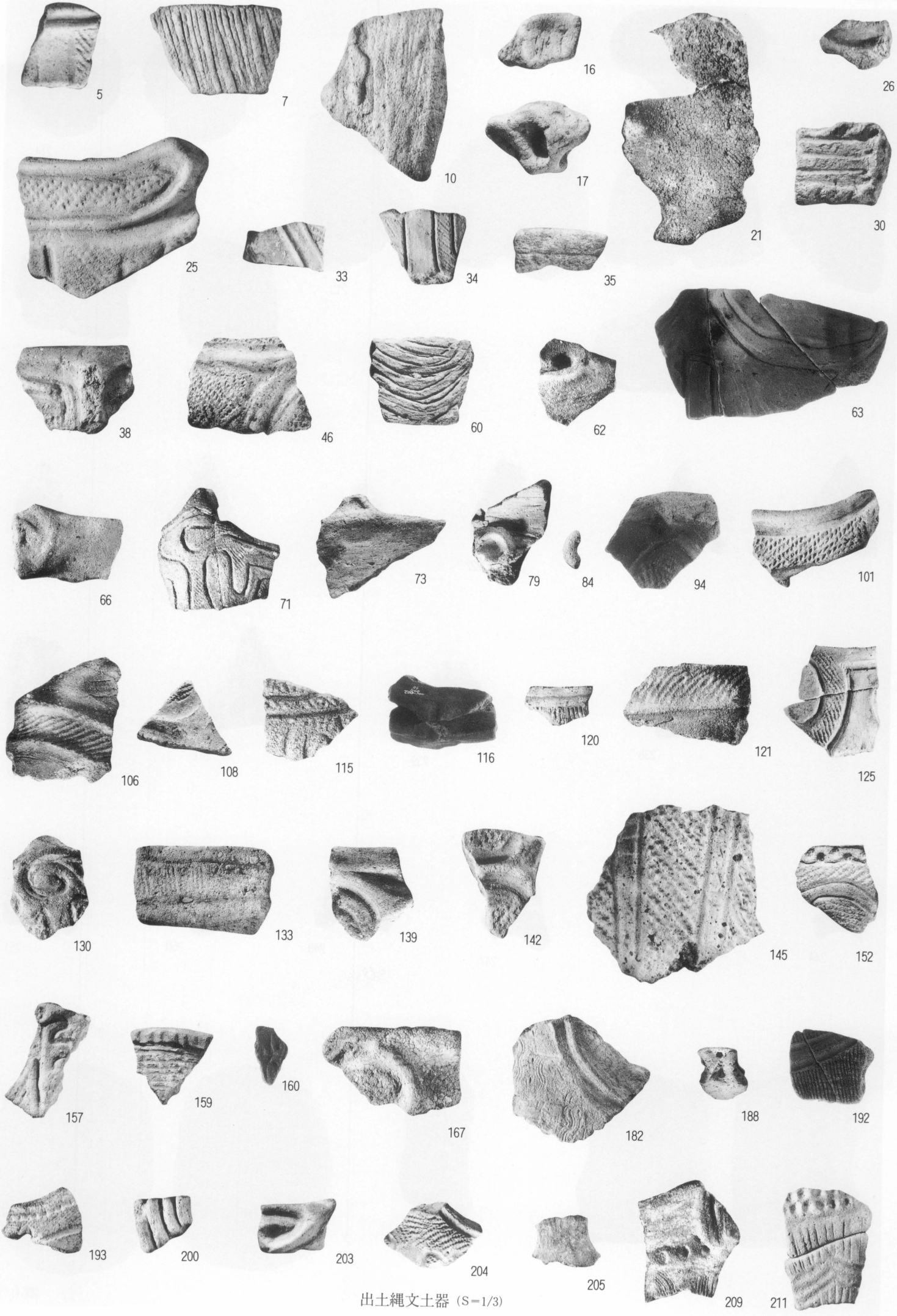
13号溝



8号溝



14号柱穴列



出土繩文土器 (S=1/3)

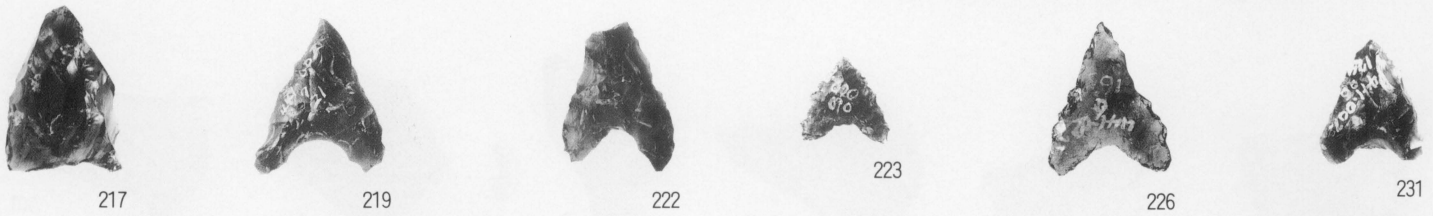


214
(2/3)

213
(1/2)

215
(1/2)

216
(1/2)



217

219

222

223

226

231



236

238

239

241

242



244

245

247

248

250

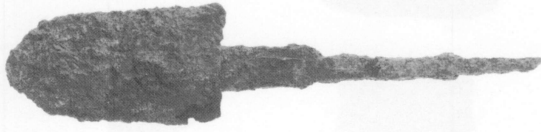
251



253
(1/3)

254
(1/3)

256(1/3)



てつぞく
鉄鋸



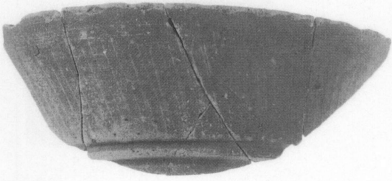
刀子



つき
坏



ていへい
提瓶



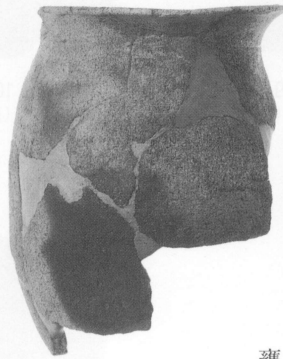
ほろう
甗



しき
甗



かめ
甗



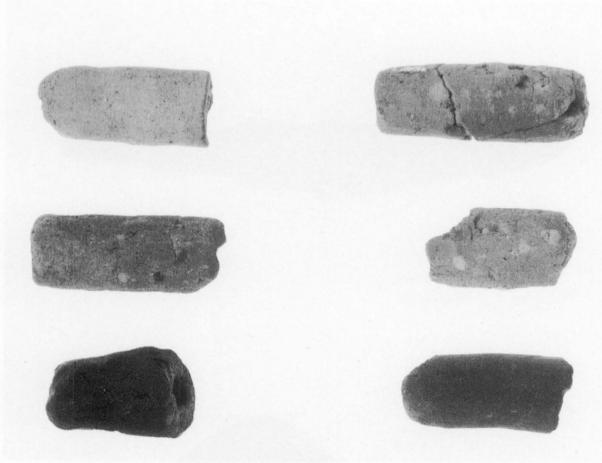
甗



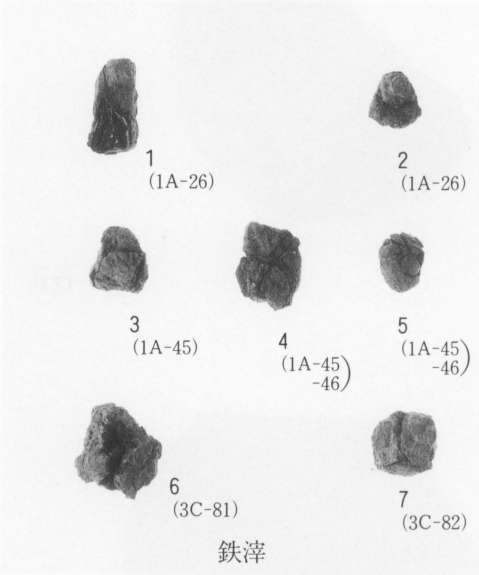
甗



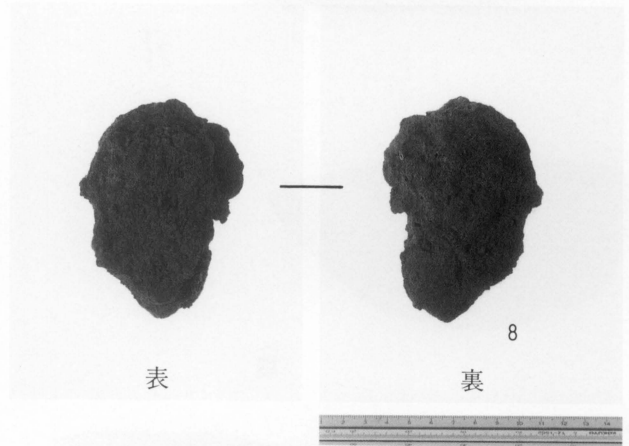
刀子



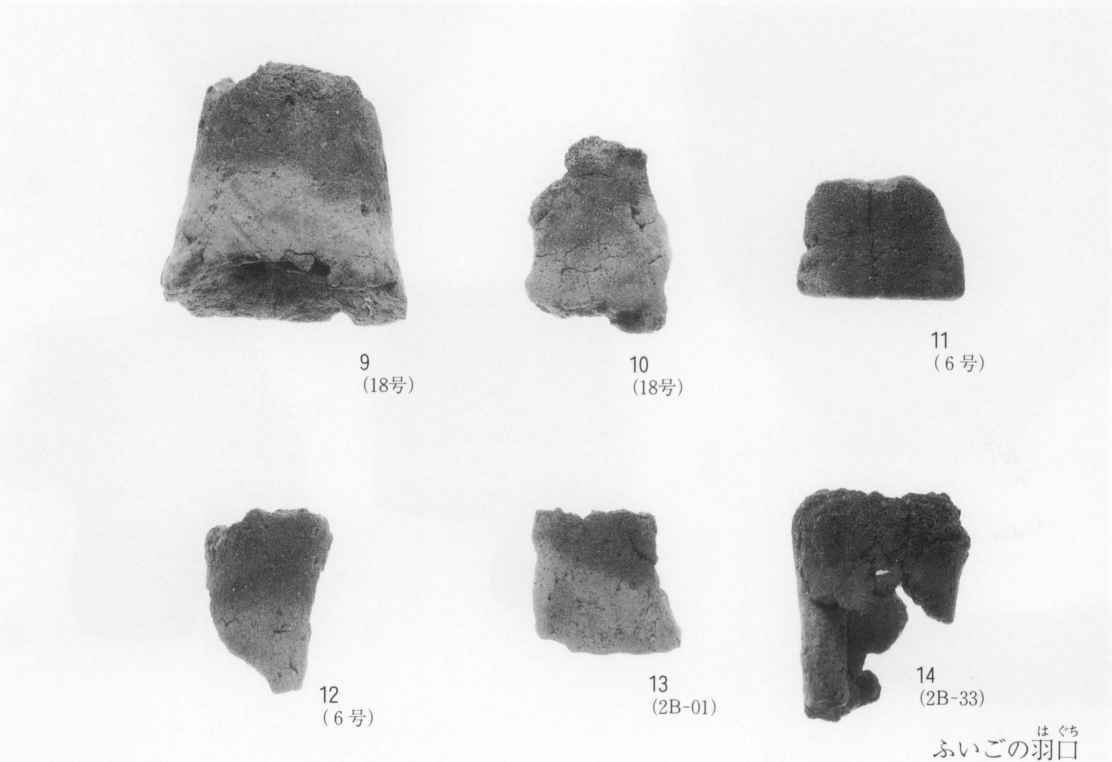
どすい
土錘 (6号住居跡)



鉄滓



椀形滓 (6号住居跡)



はぐち
ふいごの羽口

報告書抄録

ふりがな	おおたきまちいちばだいいせき							
書名	大多喜町市場台遺跡							
副書名	国道297号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第286集							
編著者名	土屋治雄							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811							
発行年月日	西暦 1996年 3月 29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちばだいいせき 市場台遺跡	ちばけんいすみぐん 千葉県夷隅郡 おおたきまちこやま 大多喜町横山 あがらちばだいい 字市場台	441	002	35度 18分 2秒	140度 14分 35秒	19950601～ 19950724	700	歩道建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市場台遺跡		先土器時代			剝片			
		縄文時代	縦穴状遺構 土坑	4基 4基	縄文土器(前～晩期)、土偶、凹石、土器片錘、石鏃、石棒、黒曜石、土製円板、磨石			
	集落 生産	古墳時代	縦穴住居跡 溝 土坑 縦穴状遺構	2軒 1条 1基 2基	鉄鏃、刀子、須恵器、提瓶、甕、土師器、管状土錘、羽口、鉄滓			
		中世以降	溝 柱穴列	2条 1列				

千葉県文化財センター調査報告第286集

大多喜町市場台遺跡

国道297号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書

平成8年3月29日発行

編	集	財団法人 千葉県文化財センター
発	行	千葉県土木部 千葉市中央区市場町1-1
		財団法人 千葉県文化財センター 千葉県四街道市鹿渡809-2
印	刷	大和美術印刷株式会社 千葉県木更津市潮浜2-1-10
